

505

26



始



31. 5. 31

1405

505-26

國民童話



野村八良著

東京神田
國史講習會

大正
11. 11. 8
內交

序

此の國民童話は、古來行はれてゐる童話（廣義に解して、神話、傳説をも含めて言ふ。）の代表的なもの十五題を解説したのである。抑、國民童話は一般古文學と同様、過去の國民文化を有體に示したもので、文化研究上資料となるものである。故に本叢書の一として世に問ふのは、大に意義あることと信ずる。

余の童話研究は、明治四十三年の頃既に大體の組織が出来、稿本は餘程浩瀚となつてゐるが、都合に依つて今日迄出版を見合せてゐる。此の小冊子は主として該研究の要領を摘んだもので、紙數に制限がある爲に論じ足りない點もあるのは、自ら遺憾とする所である。

余の研究の前驅者として、余を啓發したもので最も著しいのは、高木敏雄氏の比較神話學である。其の他益を受けた著書や論文は頗る多い。又比較説話學上のもものでは、

特に S. Baring-Gould.—Curious Myths of the Middle Ages. E. S. Hartland.—The Science of Fairy Tales. を参考したのである。

文學博士芳賀矢一氏、三浦吉兵衛氏の指教を忝うしたこと多いに就いては、茲に感謝の意を表する次第である。

大正十一年十月

著者

國民童話 目次

第一章 總論	一
第二章 神話	一〇
一 大蛇	一〇
二 海宮	一九
第三章 傳記	二八
(甲) 英雄傳説	二八
一 倭藤太	二八
二 源頼光	三五
(い) 大江山	三七
(ろ) 羅生門	四三
(は) 土蜘蛛	四九
(乙) 人神偶會傳説	五一
一 浦島	五一
二 羽衣	六六

(丙) 變化傳説……………七四

一 文福茶釜……………七四

第四章 童話……………八〇

(甲) 出世童話……………八〇

一 桃太郎……………八〇

二 一寸法師……………九〇

(乙) 禽獸童話……………九六

一 白兔……………九六

二 かち／＼山……………一〇一

三 猿蟹合戦……………一〇四

(丙) 物真似童話……………一〇九

一 瘤取……………一〇九

二 舌切雀……………一一五

三 花咲爺……………一二四

第五章 結論……………一三三

國民童話

野村八良 著

第一章 總論

通俗に行はれてゐるお伽噺といふ名稱は、英語の Nursery tale と似て居る。同じやうな意味で童話と云ふ語も弘く行はれてゐる。獨逸語の Kindermärchen に相當する。而して又英語で、Fairy tale と云ふ名目もあつて、嚴密に云ふと、神怪譚とでも譯すべきであるが、之を大まかにお伽噺若しくは童話と考へてもよい。

ハートランドの研究に據ると、此のフェアリー、テールを廣義に解釋して、超自然的脚色から成る口碑傳説であるとし、之を二種に分類してゐる。即ち一は超自然的存

在が殆ど實在の如く現され、若しくは其の景場を特殊の地方に取つたもので、其の事件が歴史上の英雄又は人物に關與してゐるもの。我が國の例で言ふと、浦島や平維茂の鬼女退治や倭藤太の蜈蚣退治などは此の圈内に屬する。第二は快樂主義の説話で、前者が事實らしい物語であるのに對して、此は全然想像的である。説話中の人物はもとより史上の人士ではない。此の種の説話の要件は、めでたしく、局の結ばれることである。此の種類の物が、言はず純粹のメーメルヘンであつて、我がかちく山や猿蟹合戦は皆さういふ範圍のものである。

一寸斷つておきたいのは、此の童話と云ふのは、文學上からは精密な區分が必要である。それは童話には國民童話 (Volksmärchen) 即ち古來民間に傳承せられてゐる説話と、創作童話 (Kunstmärchen) 即ち文藝家の手で新作せられる説話と兩様あることである。本書で取扱ふ所は勿論前者である。尙序に童話と類似の名目に就いて二三注意して見ると、先づ神話 (Myth) といふのは、或神格を中心とした古話である。(故に

神話即ち童話ではないが、本書は便宜上童話の源泉たる主要神話に溯つて説いた。) 又説明的説話といふ名目もある。此は或事實又は事物の名稱や起原を説明する爲に發生した傳説を指して言ふのである。

一體純粹な童話は、前述の如く快樂主義の物で、無傾向であるが、其の發生、變遷の際に、往々時代精神の影響を受けて、教訓的に傾くこともあつて、彼の譬諭譚 (Fabel) と目的を同じうするに至る事もある。舌切雀などがそれである。又神佛の利生を説き、社寺の縁起を述べて、信仰心をそゝるやうになるものもある。さうなると、宗教傳説 (Legend) と目すべきもので、中將姫の物語の如きがそれである。

抑、説話の發生は、民族の未開時代にある。未開時代に發生した説話は、其の當時の人に取つては、詩歌でもあり、科學でもあり、又哲學でもある。彼等は其の周圍の森羅萬象、生物と無生物とを論せず、いづれも本能や自覺を持つてゐるものと考へ、禽獸草木、山海風雲、天地晝夜、日月星辰、悉く活きて情熱を有し、意志を有するこ

と人類と異ならぬばかりでなく、却つて人類以上の賢明と威力とを具備すると信じたのである。そこで天然物素若しくは自然現象の人格化が神話中に認識せられ、随つて幾多の主宰神が生じたのである。即ち全く天然崇拜の結果である。又未開時代には、人の靈魂に就いて種々の解釋を下してゐる。靈魂の遊離を信じて居たのは其の一例である。時間と空間との觀念も亦漠然たるもので、他界との交渉を説くが如き、頗る自由なものである。

此の如き空想を逞しくした時代の説話が、漸次眞實に近づかうとする處から、史實と結合する過程を取る。これが神話から傳説への筋道である。素戔鳴尊の大蛇退治が源泉となつて、後の幾多の英雄傳説 (Heldensage) を生んだ類である。童話も亦神話や傳説から胚胎する。桃太郎に鎮西八郎爲朝の島渡りの傳説の傍が存する類である。我が國の童話成立の時期は、略、室町時代であらう。上古の世は概して神話時代で、其の結果、古事記や日本書記が出来、鎌倉時代に至つては特に武士に關する物語が謳

歌せられて傳説時代を成した。國民叙事詩 (Volks epos) の性質を帯びてゐる平家物語は其の頃の産物である。それから室町時代となると、叙事詩たる傳説は大に尊重せられて、或は謠曲に、或は幸若舞曲に結成せられて、漸次戯曲化せられたのである。國民童話が繪詞から御伽草子へと筆に載せられるやうになつたのも其の頃である。御伽草子とならない舌切雀やかちく山でも、決して徳川時代の赤本を俟つて生れたのではなく、略、室町末葉迄には漸として口碑に傳承せられて居たであらう。桃太郎の如き、菅公若しくは北畠親房卿の作だなど、言ふ人もあるが、證據のないことで、國民童話の性質上一定の作者は認められないのが通例である。

傳説童話の發展を研究するには、先づ口碑 (Tradition) と資料 (Document) とを重んじなければならぬ。此等は事實を主としてゐるからである。文學も參考しなければならぬが、作者の技巧で故意に潤色せられてゐる點があるから、注意を要する。そこで本書の企畫は、代表的國民童話の原型^{プロトタイプ}を究め、其の傳承の異同及び變遷に及ぼし、

其の包含する思想を論じ、以て縦に其の成立の由來を明らかにすると共に、又横に内外の類話にも涉ることを期した。即ち一種の文獻學的考證である。此の研究は神話學や傳説史と同様の目的で、又一般文學史の目的とも近似するもので、一言以て之を蓋へば、國民性の發展を闡明するのであり、過去の文化を討究するのである。實に傳説童話こそは民間に發達した精神的産物で、時代思想の權化と云つてよい。上古草昧の時代から幾世代を閱する間に於て、我が民族が如何に自然を畏敬し若しくは憧憬したか、神祇に對し、勇士に對して、如何に其の功業を嘆稱したか、詩的空想を那邊迄恣にしたか、其の抱いた迷信はどうであつたか、其の道念、その好尚、衣食、遊興、誓約、呪咀、民間療法等凡そ此等の思想や風習は渾然融合して國民傳説や國民童話に包含せられてゐる。故に此等の事實を知悉することは、延いて國民性の陶冶に資する次第となり、愛國心作興の一策ともなるのである。

抑、國民教育の根本義は、國民精神の統一にある。國語教育、國史教育は最も此の點に重大な關係がある。而して國民童話は國語の有力な教材となるものである。獨逸のグリム兄弟の集めたメーメルヘンが其の國民教育上如何に重んぜられてゐるかは、言ふ迄もない。童話教育は我が國でも近年著しく識者が注意を拂ふやうになつた。小學讀本をあけて見ても此の方面の文章は尠からず存在する。尙廣く考へて見ると、童話の教育は昔から一種の家庭教育として存続したとも言へる。家庭内に於ける爐邊の夜話は勿論、雛祭の人形、端午の幟、七夕、節分凡そ此等の年中行事は、傳説童話に交渉がある。我等は童話的雰圍氣中から人となつたと言つてもよからう。

ところが世間には往々誤解に基づく非難の聲がある。即ち傳説童話は其の結構が荒唐無稽で、歴史でもなく、事實譚でもない。年代や地理の觀念の漠然たるものもあり、科學思想と相容れざるものもある。畢竟愚にもつかぬ物だといふ論である。併し此は觀察を誤つたもので、童話ばかりでなく、一般文學を此ういふ風に考へてはならない。文學は眞を求めようとする立場にはないからで、飽迄國民精神が醗酵したものであり、

過去文化の結晶であるとして、國民の情感に愜へるのが本領である。右の如き誤解とは少しく違ふが、尙一二の謬見がある。それは古傳俗説の解釋法に就いてある。神話をどこまでも史實として合理的に解釋しようとするのは其の一である。新井白石が其の古史通に於て述べてゐる所は此の傾向が夥しい。(尤も古史通其物は創見に富んだ名著である。)此は神話學上では Euhemerism と云つてゐる。古傳を道義的觀念で考察するのは其の二である。井澤長秀の俗説辨にはさういふ見方から、神怪不思議の説話を多くは否定してゐる。兩者共に予の與しない所である。

本書解説の内容は、神話、傳説、童話の三部を立て、本邦説話界の代表たるもの十五題を選んで、左の分類の下に排列した。

神話として大蛇と海宮との二題を採つた。一は素尊の大蛇退治で、一は杵火火出見尊の海宮遊行である。

次に傳説は之を三類に分け、(甲)英雄傳説として、俵藤太と源頼光とを收めた。何れも怪物退治の物語である。(乙)人神偶會傳説(人神偶會の語は丹後風土記から採用した。)として、浦島と羽衣とを收めた。他界に遊行して龍女に會つた浦島、下界に天降つて人間に奇縁を結ぶ天女、此の二個の説話は元來タイプを異にするが、便宜上一括した。(丙)變化傳説として、文福茶釜の怪談、實は禪僧守鶴の奇蹟を採つた。(玉藻前の殺生石も變化傳説である。)其の他神仙傳説(役小角の如き)寺院傳説(當麻寺の如き)人情傳説(求塚の如き)繼子傳説(松山鏡の如き)等、廣く國民傳説を研究することは他日を期しておく。

更に童話は亦三類に分け、(甲)出世童話として、桃太郎と一寸法師とを收め、(乙)禽獸童話(Tiermärchen)として、白兔、かちく山、猿蟹合戦を載せ、(丙)物真似童話として、瘤取、舌切雀、花咲爺を採つた。

鼠の嫁入、猫の草紙、或は單なる一口噺、落語となると童話は殆ど無數である。併し其の多くは一場の座興を主としたもので、脚色も單純である。又狭い範囲で行はれ

てゐる地方的童話もあるが、性質が國民的でない。故に此等は本書では論及しないのである。

第二章 神話

一大蛇

素戔鳴尊の大蛇殺戮の神話は、古事記と日本書紀とが最も古い傳である。前者の文面は左の如くである。假名交りに直して引かう。

故^か避^ひ追^おえて、出雲の國の肥の河上なる鳥髪^{とりかみ}の地^{ところ}に降りましき。此のなりしも嘗其河より流れ下りき。是に須佐之男命^{すさのをのみこと}、其河上に人有りけりとおもほして、覓^まぎ上り往^いてまし、かば、老夫と老女と二人在りて、女^を女^を中^をにすゑて泣くなり。汝^いたちは誰ぞと問ひたまへば、其老夫僕^{わが}は國^{くに}の神、大山津見神の子なり。僕^{わが}が名^なは足名椎^{あしなづち}、妻^めが名^なは手名椎^{てなづち}、女^をが名^なは櫛名田比賣^{くしなだひめ}とまなす。亦^い汝^いの哭^なく由^ゆは何ぞと問ひたまへば、我が女^をは本より八稚女^{やちめ}在りき。是に高志^{こし}八俣遠呂智^{やまのち}なるも年毎に來て喫^くふなる。今それ來ぬ可^べき時^{とき}なるが故^ゆに泣くとまなす。其形はいかさまにかと問ひたまへば、それが目は赤^{あか}かぢちなして、身一つに頭^{かしら}八尾^{やち}八有^{やち}

り、亦其身に蠶^{こけ}又^{また}楡^{うい}楡^{うい}生^なひ、其長さ^{ながさ}八谷^{やち}峽^{せき}八尾^{やち}を度^{わた}りて、其腹を見れば、悉にいつも血あえ爛れたりとまなす。爾^{しか}速^{すみ}須^す須^す佐^さ之^の男^{をとこ}命^{のみこと}、其老夫に、是^い汝^いの女^をならば、吾^{われ}に奉^たらむと詔^{みこと}言^{こと}たまふに、かしこけれど御名^{みな}をしらすと白^あせば、吾^{われ}は天照大御神のいろせなり、故^ゆ今天より降りましつと答^{こた}へたまひき。爾^{しか}に足名椎^{あしなづち}、手名椎^{てなづち}の神、然^{しか}坐^まさば恐^{おそ}し奉^たらむと白^あしき。爾^{しか}速^{すみ}須^す須^す佐^さ之^の男^{をとこ}命^{のみこと}、乃^{すな}ち其の童女^{わらわ}を湯津^{ゆつ}爪^{つま}櫛^{くし}に取^と成^{なり}して、みづらにさして、其足名椎^{あしなづち}、手名椎^{てなづち}の神に告^つりたまはく、汝^いたち八俣^{やま}折^せの酒^{さけ}を醸^かみ、また垣^{かき}を作り廻^{めぐ}し、其垣^{かき}に八の門^{かど}を作り、門^{かど}毎^{ごと}に八のさすきを結^{むす}ひ、そのさすきごとに酒船^{さけぶね}を置^おきて、船^{ぶね}毎^{ごと}に其八俣^{やま}折^せの酒^{さけ}を盛^もりて待ちてよとのりたまひき。故^ゆ告^つりたまへるまゝにして、此^まく設^ま備^{そな}へて待^{まち}つ時に、其八俣^{やま}遠^{とほ}呂^ろ智^ちに言^{こと}ひしが如^{ごと}來^きつ。乃^{すな}ち船^{ぶね}毎^{ごと}におのもく頭^{あたま}を垂^たれて其酒^{さけ}を飲^のみき。是^{こゝ}に飲^のみ酔^よひてみな伏^ふ寝^ねたり。爾^{しか}速^{すみ}須^す須^す佐^さ之^の男^{をとこ}命^{のみこと}、其御^み佩^はかせる十拳^{じゅうけん}劍^{けん}を抜^ひきて、其蛇^{へび}を切^きり散^ちりたまひしかば、肥^この河^か血^ちになりて流^{なが}れき。故^ゆ其^{その}中^{ちゆう}の尾^びを切^きりたまふ時^{とき}御^み刀^やの刃^は毀^こげき。怪^{あや}しと思^{おも}はして、御^み刀^やのさきもちて刺^さし割^わきてみそなはし、かば、都^つ牟^む刈^がの太^{たい}刀^や在^あり、故^ゆ此^{こゝ}太^{たい}刀^やを取^とりして、あやしき物^{もの}ぞと思^{おも}はして、天照大御神^{あまてらすおほみかみ}に白^あし上げたまひき。こは草^{くさ}那^な藝^ぎ之^の太^{たい}刀^や也^{なり}。

尙後の物では、劔卷や謠曲にもある。

先づ素戔鳴尊の系統、神名及び神格をざつと説明しよう。諸^{もろ}册^{せき}二^に尊^{そん}が大^{おほ}八^{やち}洲^{しゅう}國^{くに}及び海^{うみ}、川^{がは}、山^{やま}並^{なら}に木^き、草^{くさ}の祖^そをお産^うみになり、それから日^ひ神^{かみ}、月^{つき}神^{かみ}、蛭^{むす}兒^こ並^{なら}に素^す尊^{そん}をお

うみになつた。書紀の本文に日神、月神、素尊の所謂三神分治の御事が明白に記されてある。併し古事記や書紀一書を見ると幾分か相違がある。即ち三神を諸冊二神所生の神とするのと、諸尊から生なりましたとするのとである。新井白石の古史通は書紀を採り、平田篤胤の古史傳は古事記に據つてゐる。素戔嗚尊の御名は、其の「すさ」に「すさび」の意があつて、進む（轉じて荒ぶる）義であるとするのは、賀茂真淵以來宣長や、篤胤の繼承する所である。御名に冠らせるに、「神」といふのは尊嚴の稱、「速はや」といひ、「建速たけはや」と云ふのは、勇悍な御性を表したもので、白石の言つてゐる通りと思ふ。其の神格に就いては先年姉崎正治氏と高木敏雄氏の間論せられた事があつたが、要するにアストンの神道（Shinto: The way of the gods.）に説いてゐるやうに、暴風雨（Rainstorm）の神格化であらう。尊の主宰の領域が海原であること、「青山を枯山なす泣枯らし云々」の哭泣の事の傳などは、暴風襲來の天然現象を譬喩したと思はれる。

天照大御神が天の石窟にお籠りになつた事の後、諸神が議つて、素尊を追放せられ、そこで尊の天降られた地が出雲國簸の川上である。（尤も書紀一書に據ると、尊は其子五十猛神いたけるを帥ゐて新羅に下られ、それから出雲にお出でになつたとある。）其の地に老人夫婦が少女を伴れて住んで居る。女子の名を書紀一書に稻田媛としてゐる。「くしなだ」は「くしいなだ」の略で、「くし」は奇で美稱、稻田は水田の開けて居る意で、自ら地名となつてゐたであらう。

次に「こしのやまたをろち」である。高志こしは出雲國神門郡高志であるとは白石も宣長も一致してゐるが、越こしの國としてゐるのは鈴木重胤や飯田武郷である。古説話の地理は必ずしも斷定の限ではない。「やまた」は古傳の通り八頭八尾の意であるが、「をろち」の解釋は今迄適當な説が一つも無い。私見は後に述べる。此の大蛇が年々犠牲（人身御供）を取る。素尊は此の慘害を除くべく、其の衝に當られたのである。其の方策として、少女をゆつ爪櫛にとりなしたといふ事と、酒を設けた事とがある。前者に就

いては古來諸説紛々であるが、宣長の説の如く、姫の身を櫛に變化なして、尊の御髮に挿されたのだといふので能く分る。此は西歐の神話に頻出する變形 (Metamorphose) の思想らしい。さうすると姫を酒槽の邊に坐せしめて大蛇を待つといふのは異傳となる。八やしほをりのさ醞酒といふのは幾度も造りかへした酒である。曾て史學會で井上哲次郎氏が日本民族の起原に關する考證を講演せられた中に、マダガスカル島の馬來系統の民族間の話に、七頭の大蛇があり、Pain 酒を呑んで死後山岳の大きに膨脹したといふ筋のがあると言はれた。此の神話と同様、大蛇に酒は附物と見える。支那には大蛇殺戮の古話が尠からず古書に存するが、最も注目すべき一例は、搜神記卷十九にある左の文である。

東越閩中有庸嶺。高數十里。其西北隙中有大蛇。長七八丈。大十餘圍。土俗常懼。東治都尉及屬城長吏多有死者。祭以牛羊。故不得福。或與人夢。或下論巫祝。欲得啗童女年十二三者。都尉令長並共患之。然氣厲不息。共請求人家生婢子。

兼有罪家女。養之。至八月朝祭。送蛇穴口。蛇出吞嚙之。累年如此。已用九女。爾時預復募索未得。其女。將樂縣李誕家有六女。無男。其小女名寄。應募欲行。父母不聽。寄曰。父母無相。惟生六女。無有一男。雖有如無。女無緹紫濟。父母之功。既不能供養。徒費衣食。生無所益。不如早死。賣寄之身。可得少錢。以供父母。豈不善耶。父母慈憐。終不聽去。寄自潛行。不可禁止。寄乃告請好劍及昨蛇犬。至八月朝。便詣廟中。坐懷劍將犬。先將數石米。密灌之以。置穴口。蛇便出。頭大如困。目如二尺鏡。聞香氣。先啗食之。寄便放犬。犬就嚙昨。寄從後斫得數創。瘡痛急。蛇因踊出。至庭而死。寄入視穴。得其九女。燭體。悉舉出。咤言曰。汝曹怯弱。爲蛇所食。甚可哀愍。於是寄女緩步而歸。越王聞之。聘寄女爲后。拜其父爲將樂令。母及姊皆有賞賜。自是東治無復妖邪之物。其歌謠至今存焉。

即ち此には、大蛇が童女を取るといふ要素が含まれてゐる。

大蛇殺戮と共に寶劍が出現した。順序としては、尊の佩劍十拳劍の事、大蛇が殺されて雷となつて天に昇つた一つの傳、並に寶劍の事から一般上代の刀劍に及ぶまで附説しなければならぬが、餘白が無いから總て省略して置く。

最後に此の大蛇神話に對して、神話學的解釋を施さうと思ふ。併し新井白石が古史通に、大蛇と云ひ、土蜘蛛といふのは、皆惡神で、來り喫ふといふのは劫奪を意味する。一身八頭八尾といふのは、八谷八尾の地に據るか、又は兄弟八頭の意であらうと推斷してゐるのは、こゝには從ひ難い。アストンは其の神道に於て、此の大蛇を蛟龍の類とし、川の神としてゐる。以爲らく、河流の觀念が蛇、大蛇、龍の動物として、水神を具體化することは弘く行はれる。デンニスの支那の傳説や、ロバートソン、スキスのセミ民族の宗教等に例がある。一體河流が波線狀の行路と、その足が無くて神祕的進行を以てする事とは、大蛇を附會するに頗る自然的で、水流は一面に於て灌漑の利はあるが、他面に於ては氾濫して人畜を害する。之を譬喩的に大蛇の慘害とする

のは尤である。而して松柏生^ニ背上^一と云ひ、蔓^ニ延^ニ八丘八谷之間^一と云ふのも、河流の堤防や蜿蜒たる長流を暗示するものであると云ふのである。一體「をろち」の語義は、余は「をろ」「ち」の結合で、「をろ」はアイヌ語の *Woro* 即ち山岳若しくは河川の意であり、「ち」はみづち(虬)の「ち」で、此は國語で父の如く、靈長の意があると思ふ。つまり「をろち」は「みづち」と類語である。(從來行はれてゐる本居宣長や平田篤胤の解釋では、今日の人を満足させぬ。)遠江國濱名郡の於呂(赤狹村の内)に於呂神といふのがある、これは庵玉川の河伯蛇神を祀つてゐるといふ事である、して見れば右の旁證となる。(於呂では假名が違ふが、深く咎めるを要しまい。)

大蛇殺戮の物語は、素尊神話全體の上から考へると、英雄神としての功業を物語つた一挿話であつて、而して此の怪物退治が、一方では靈劍出現の由來を語つた説明的神話ともなつてゐるのである。

素尊と櫛名田比賣^{くしなだひめ}の關係は、希臘神話の *Percus* 對 *Andromeda* に比較することが

出来る。アンドロメダはエタイオビーンのケホイス王の女である。王妃ガジイバイアがネライデン（海洋の主宰神ボザイドンの配偶）の怒に觸れた。ツオイスの神託で王女を犠牲にせよとあつて、アンドロメダは巖角に縛られて、海の怪物に與へられようとする。爰に英雄神ベルソイスが翼のある靴を履き、メドウザの首を取つて還つて來るのを見て、救助を求める。ベルソイスはやがて怪物を退治して、アンドロメダを危難から釋放し、遂に彼女と婚するのである。彼我兩神話の一致點は次の如くである。

- 一、英雄神が他地方から來る。
- 二、偶、少女の危難に遭遇する。
- 三、英雄神が怪物を退治する。
- 四、兩者結婚する。

此の型に屬する説話はアリアン神話には類例が多い。次節の倭藤太の蜈蚣退治は、怪物退治だけで、成婚の要素は無いが、今昔物語の猿神の話は同一形式である。それから彼の源三位頼政の鶴退治も怪物射殺の話で、その功で菖蒲の前を貰つたと言ふ點では、成婚の要素が餘波を留めてゐるとも見受けられるのである。

二 海宮

彦火々出見尊の海宮遊行の神話は、先づ古事記に據つて見なければならぬ。即ち左に假名交りとして示さう。

故火照命は、海幸彦として、鱧廣物鱧狹物を取りたまひ、火遠理命は、山幸彦として、毛毳物毛柔物を取りたまひき。こゝに火遠理命其の兄火照命に、互に幸を易へて用ひてむと云ひて、三たび乞はし、かども、許さざりき。然れども遂にわづかに先易へたまひき。爾火遠理命、海幸をもちて魚釣らすに、かつて一つも得給はず。亦その鉤をさへ海に失ひ給ひき。是にその兄火照命其の鉤を乞ひて、山幸も己が幸々、海幸も己が幸々、今はおのゝく幸返さんと云ふ時に、其の弟火遠理命のりたまはく、汝の鉤は、魚釣りしに一つも得ずて、遂に海に失ひてきとのりたまへども、その兄強ちに乞ひ徴りき。故その弟、御佩の十拳劔を破りて、五百鉤を作りて償ひ給へども、取らず、亦千鉤を作りて償ひたまへども、受けずて、鱧彼の本の鉤を得むとぞいひける。

是に其の弟、海へたに泣き患ひいますときに、鹽椎神來て問ひけらく、いかにぞ虚空津日高の泣き患ひ給ふ所由はと問へば、答へ給はく、われ兄と鉤を易へて、その鉤を失ひてき。かくてその鉤を乞ふ故に、あまたの鉤を償ひしかども、受けずて、猶その本の鉤を得むと云ふなり。故泣き患ふとのりたまひき。こゝに鹽椎神、あれ汝がみことのみために、善き業せむと云ひて、即ち无間かつまの小船を造りて、その船に載せ

まつりて、教へけらく、我此の船押流さば、や、しましいでませ、うまし路あらむ、乃ちその道に乗りて往ましなば、鱗のごと造れる宮、それ綿津見の神の宮なり、その神の御門に到りましなば、かたへの井の上に湯津香木あらむ、故その木の上に乗せまば、そのわたの神の御女、見て譏んものぞと教へまつりき。故教へしまに、こゝすこしいでましけるに、備にその言の如くなりしかば、即ちその香木に登りてまし、こゝにわたの神のみむすめ豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井にかけあり、仰ぎて見れば、麗しき壯夫あり、いとあやしとおもひき。爾火遠理命その婢を見たまひて、水を得しめよと乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れてたてまつりき。爾水を飲みたまはすして、御頸の璣を解かして、御口に含みて、その玉器に唾入れたまひき。是にその璣に著きて、婢璣を得離たす、故璣著けながら、豊玉毘賣命に進りき。爾その璣を見て、まかたちに、若し門の外に人有りやと問ひたまへば、あが井の上の香木の上に人います、いと麗しき壯夫にます、あが王にもまさりていと貴し、故其の人水を乞はせる故に、たてまつりしかば、水をば飲まさすて、此の璣をなも唾入れ給へる、是え離たぬ故に、入れながら持ちまゐきてたてまつりきと申しき。爾豊玉毘賣命奇しと思ほして、出で見て、乃ち見めて、目合して、其父に、吾が門に麗しき人いますと申したまひき。爾に海神自ら出で見て、此の人は、天津日高の御子、虚空津日高にませりといひて、即ち内に率て入れまつりて、海龍の皮の疊八重を敷き、また繩疊八重を其の上敷きて、その上にませまつりて、百取の机代の物を具へて、御饗して、即ち其のみむすめ豊玉毘賣を婿せまつりき。故三年といふまで、その國に住みたまひき。

是に火遠理命、その初の事を思ほして、大きな敷一つしたまひき。故豊玉毘賣命其のみなげきを聞かして、その父に白したまはく、三年住みたまへども、恒は敷かすことも無かりしに、こよひ大きな敷一つしたまひつるは、若し何の由あるにかとまをし給へば、其の父の大神、其の犍夫のきみに問ひまつらく、けさあがむすめの語るを聞けば、三年ましませども、恒は敷かすこともなかりしに、こよひ大きな敷したまひつと申せり、若し由有りや、またこゝにませるゆゑはいかにぞと問ひまつりき。爾其の大神に、備に、其の兄の失せにし、鉤をはたれるさまを語り給ひき。是をもて海神、悉に、鱧の廣物鱧の狭物をよびあつめて、若し此の鉤を取れる魚ありやと問ひ給ふ。故もろゝの魚ども白さく、このころ赤海鯉魚なも、喉にのぎありて、物え食はずと愁ふなれば、必ずこれ取りつらむと申しき。こゝにたひのみとを探りしかば、鉤有り、即ち取り出で、清洗して火遠理命に奉る時に、その綿津見大神誨へまつりけらく、此の鉤を、其の兄に給はむ時に、宣り給はむまは、此の鉤は、淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤と云ひて、後手に賜へ、しかして、その兄高田を作らば、汝が命は下田をつくりたまへ、その兄下田を作らば、汝が命は高田をつくりたまへ、しかしたまは、あれ水を掌れば、三年の間、必ずその兄貧しくなりなむ、若しそれしかしたまふことを恨みて、攻めなば、鹽盈珠を出だして弱らし、若しそれ愁ひまをさば、鹽乾珠を出して活かし、此くして惣苦め給へと申して、鹽盈珠鹽乾珠あはせてふたつを授けまつりて、即ち悉に、和遷魚どもを集めて、問ひたまはく、今天つ日高の御子虚空つ日高、上つ國に出幸さんとす、誰は幾日に送りまつりてかへりこと申さむと問ひ給ひき。故おのもゝ身の長さのまに、日を限りて白す中に、一尋和遷、われは一日に送り

まつりて、還り來なむと申す。故その一尋和邇に、然らば汝送り奉りてよ、若し海中を渡る時にな惶畏せまつりそと宜りて、即ち其の和邇の頸に載せまつりて、送りだしまつりき。故いひしがごと、一日のうちに送り奉りき。其の和邇返りなむとせし時に、佩かせる組小刀を解かして、その頸に著けてなも返したまひける。故その一尋和邇をば、今に佐比持神とぞいふなる。

是をもて備に海神の教へし言の如くして、かの鉤を與へ給ひき。故それより後いよ、貧しくなりて、更に荒き心を起して迫め來。攻めんとする時は、鹽盈珠を出して溺らし、それ愁ひ申せば、鹽乾珠を出して救ひ、此くして惣苦めたまふ時に、稻首白さく、僕は自今以後汝が命の夜晝の守人となりてぞ仕へ奉らむと白しき。故今に至るまで、その溺れし時のくさんくの態絶えず仕へまつる也。

右と共に日本書紀の方も併せて看なければならぬ。それは古事記の方では、天孫天津日高日子番能邇邇藝能命が神阿多津比賣即ち木花之佐久夜毘賣に婚して、火照命、火須勢理命、火遠理命の三柱を挙げられたとあるが、書紀の方では、火闌降命、彦火火出見尊、火明命の三柱とある。さうして古事記の神話は火遠理命を主人公として火照命を配したのであるが、書紀のは彦火々出見尊と火闌降命との間の事としてある。此の點は謠曲の玉の井も、巖谷小波氏の日本昔噺も書紀の方に據つてゐる。火遠理命と

火々出見尊とは同一神格であるが、火照命と火闌降命とは同一神格とは認め難い。新井白石の古史通には、古事記に火照命とあるのは、傳寫の誤だと言つてゐる。火照命は火明命と一致するのである。此等の神々は、八尋殿で御産のあつた時、殿に埴を塗り、火をかけられたといふ故事から、何れも火に關する御名を帯びさせられたのである。本居宣長は火々出見の御名を、穗々根耳の義として、稻穗に關するとしてゐるが、受取り難く思ふ。

兄命と弟尊との幸易は此の神話の發端である。初め兄命は海を領し、弟尊は山を領して、各、漁獵の分掌が定つてゐたものと見える。それを何の爲に交換せられたか、それは別に深い意味はあるまい。又交換に就いて、古事記には弟尊が乞はれたとし、書紀には兩者の合議とし、書紀一書には、兄命の發議となつてゐる。説話の筋としては、第三の一番尤らしい傳承である。此の幸易の結果が面白く行かないのは當然で、そこで幸返となる。處が尊は釣針を失はれたので、こゝに兄弟諍となつたのである。

尊の窮境をお救ひしたのが鹽椎の神である。此の神は飯田武郷は住吉の神としてゐるが、名義から考へると、「潮つ路」で海路の主宰神と認めてよからう。鹽椎神は「まなしかつま」の小舟を造つて、尊を海宮に導いた。「まなし」は目のこんだ意、「かつま」は籠の古語である。併し之を言葉通りに見るか、新井白石のやうに、竹を緻密に編んで帆席とした舟と見るかと云ふに、それはやはり籠舟として置いても、古話の筋としては何等の差支はない。強ひて事實に當て箴めて眞を求める事はないのである。

綿津見の神は、海洋の主宰神である。「わた」は海の義である。その宮は海底にあるとしてゐる。即ち此の世界を「上つ國」と言つてある。海宮を鱗の如く造つた宮と云つたのは、壯麗な殿門の重疊してゐる形容である。書紀の雉堞整頓、臺榭玲瓏などであるのは、漢意である。

古事記に井水を汲みに出る從婢の事が云つてあるが、書紀には婢の事は無い。海神が尊を空みつ日高即ち太子であると云つて、大に歡待申上げるのは、流石に日本の神

話としての特徴が現れてゐる。海神の女豊玉姫、これは容姿の閑雅なものを稱へた名で、姫から愛情を注がれた結果、尊との間に婚儀が成立つた。此は此の神話の中心である。淹留三年、尊は長大息を發せられた。そこで釣針の詮索となつて、遂に尊はそれを取戻され、それから海神の教示即ち咒咀の辭を受け、尙滿珠干珠を贈られてお還りになるのである。書紀には訣別の際、豊玉姫が妊娠の事をお告げになつたとある。尊を上界に送り届ける使命は、一尋和邇が果した。「わに」の事は、後の白兎の條にも説くが、此も海舶の比喩と言ふを要しない。アストンが Sea-monster or dragon と解してゐるのでよい。

尊がお還りになつて、海神の言の通りに、咒咀の辭を以て兄命に釣針を返される。兄命は窮地に陥つて、再度の鬭争となつたが、滿珠干珠の超自然的威力に依つて、活殺自在の神通力を振ひ、遂に兄命は降伏せられ、書紀一書に傳へる所に據ると、生兒八十連屬、御垣の下を離れずして、俳優の民とならうと誓はれたともある。此の末段は

即ち火闌降命を以て隼人の祖とし、其の狗吠の故事の本源を語るものとなつてゐる。

此の神話は前半に於て、彦火火出見尊が兄命から一種の迫害を蒙られ、他界から還られての後半に於ては、勝利者となられた。尊は神話學上太陽神としての運命を有せられると考へられる。(尙一つ附記すべきは、後世惠美須神として祀るのは、彦火火出見尊であると云ふ説がある事である。併し此の事を詳説するのは今は省いて置く。)

此の海宮神話に於ける彦火火出見尊の運命は、説話の性質上、末子成功説話と認むべきもので、此の意味に於て、大國主神の神話と比較せられるものである。大國主神の神話は、古事記の叙述を見ると、頗る多岐に亙つてゐる。先づ最初に御名を五つ擧げ、それから稻羽の白兔の挿話(後節参照)に及び、八上姫が八十神の言に従はれないで、大國主神に嫁はうとあることからして、八十神が大國主神を虐げられる事となる。即ち妻争つまあらそひから起つた兄弟争いなかひである。大國主神に對する迫害は一度ならず二度迄もあつて、ほとく御身も危かつたが、祖命みまののみことの庇護によつてお助かりになる。それから又

根の國即ち夜見の國(地獄じごくと認める)にお出でになると、其の主宰神たる素戔嗚尊の迫害をもお受けになつた。處が其の女神の須勢理毘賣いせりひめと婚して、生太刀、生弓矢を出し、難を逃れて上界に還つて來られる。これから面目一新、諸兄を征伐して、英雄神としての光輝を發揚せられるのである。此う云ふ諸點が彦火火出見尊の運命と好個の對照で、此の兩神話には、

一、兄弟争から弟命が窮地に陥られる。二、弟命の救護者がある。三、他界に行かれる。四、他界の主宰神の女と婚せられる。五、他界から將來した物を以て兄命を従へる。

といふ共通の要素を包含する。

末子成功のメールヘンはグリム童話集第六十三番の三つの羽毛(Die drei Federn)はその適例である。尙バーリンググールドの A Book of Folk-Lore. にもしつゝ書いてあるのは、参考に資するに足りる。

第三章 傳 説

(甲) 英雄傳説

一 倭藤太

蜈蚣退治の勇士としての倭藤太の傳説は、其の筋は全然倭藤太の語から出てゐると云つてよい。此の本は寛永頃の刊行であるが、著作年代は室町時代と認められる。其の内容は二部に分れてゐる。即ち前半は三井寺の撞鐘つぎかねの由來を語り、後半は將門誅戮を叙べてゐる。此の草子の外に参考となるのは、太平記卷十五の三井寺合戦並當寺撞鐘事附倭藤太事である。此は草子よりも寧ろ古い傳承らしい。三上山と云はずして比良の高峰と云ひ、瀬田の橋で退治したと云はないで、龍宮での事としてゐて、少しづつの異同がある。建仁頃の土佐行長の書いた繪巻物があるので見ると、此の傳説は鎌倉時代以後傳稱せられてゐたのである。尙又、謠曲の鐘引も参考になる同一資材の物

である。

扱此の傳説の源泉と目すべきものは、古事談の神社佛寺の條の一説話で、冒頭に園城寺の鐘は龍宮の鐘也と言つてある粟津冠者の話である。之に據ると、粟津冠者は堂宇建立について鐘を鑄ようとし、廻國して出雲の海に到り、それから龍宮に誘はれ、龍王に頼まれて、その怨敵たる大蛇を退治し、其の禮として、龍宮寺の釣鐘を貰ひ、粟津に歸つて廣江寺を建て、其の鐘を該寺に置いたが、後、園城寺に收まつたといふのである。此の粟津冠者といふ勇士が近江に關係ある秀郷に同化し、龍宮もいつしか琵琶湖となつて、此の三上山の蜈蚣退治漸が発生したと見なければならぬ。それから又古事談の話の發達するファースト、ステップの位置にあるのは、今昔物語卷十の於海中二龍戰獵師射殺一龍得玉語といふ支那の話である。古事談のは龍蛇が相敵してゐるが、此の方は双龍相闘つてゐる。彼は勇士、此は獵師で、共に射を能くしてゐる。報謝として得た物には鐘と玉との違がある。併し話の型は全く同じであると云へ

る。尙、今昔物語卷廿六の加賀國諍蛇蜈島行人助、蛇住、島語といふ猫の島の話になると、又一層倭藤太式になつてゐるのである。即ち此は蛇の依頼を受けて蜈蚣を平げたと云ふ主要素が存してゐる。龍宮から土産を貰つて歸るのではないけれども、美田の多い島に迎へられたのであるから、福徳を得たといふ結末は共通して居る。旁系的類話としては注目すべきものと思ふ。

さて説話の主人公たる秀郷が、倭藤太と言はれる藤太は、藤原太郎の義で別に仔細はないが、倭といふのは龍宮から貰つた倭の謂はれに因るとしたのは所謂お話で、田原莊に言掛けた一つの洒落であると思ふ。秀郷は別業を近江の田原莊即ち栗太郎の今の大石村に置いてゐたのである。平治物語の歌に、「將門はこめかみよりぞきられけるたはら藤太がはかりごとにて」と云ふのも、米と云ひ倭と云つて滑稽的な縁語を使つたのである。能狂言の米市には、倭に小袖を着せて背負ひ、倭藤太の娘子米市御寮人の御里歸りだと戯れてゐるから、民間では田原藤太を倭藤太としてしまつたと言つてもよからう。

勢多橋は今の瀬田村橋本にあつて、琵琶湖から流れ出る勢多川に架けてある。此の橋は天智天皇の時己に其の名が見え、後、貞觀三年に焼けた事もあつた。清少納言の枕草子の「橋は」の條にも名が出てゐる。延喜式には此の橋を修理する次第が書いてある位で、嚴重な官橋である。之を唐橋とも云ふのは、唐風の橋梁の義であると思ふ。和歌には長橋と詠んだのが多い。

琵琶湖は淡海とか近江之海とかいふのが古稱で、琵琶湖といふのは大分新しい。又邇保郷から出て、鴉のうみとも云はれた。汐ならぬうみとも古歌にあるのは、淡水湖の意である。此の倭藤太の傳説で大に注目すべきは、海底の龍宮を此の湖水に持つて來てゐる點である。海宮神話の海神の宮の思想が、佛説の普及と共に外來思想を加味せられて、海底龍宮説が起つた。謠曲海土はその一例で、空は一つに雲の波、烟の浪をしのぎつゝ、海漫々として、直下と見れども底もなく、ほとりも知らぬ海底に龍宮

がある云ひ、三十丈の玉塔聳え、八龍並み居たりなど、ある。又謠曲春日龍神は古今著聞集の記事を潤色したもので、殊に其の末段には八大龍王の出現を云つてゐるが、猿澤の池に龍神を結合するに至つた。さういふ過程で、此の湖水についても湖底龍宮説が起つたのである。これは一つには國民の空想が地理的に狹隘になつた結果とも云へよう。太平記卷卅八に湖水乾く事といふ條がある。即ち康安二年の六月から十一月迄大旱魃で、琵琶湖も三丈六尺干て、様々の不思議があつたと云つて、次のやうに書いてある。

白鬚明神の前にて、澳に二人して抱く許りなる檜木の柱を、あはひ一丈八尺づゝ立雙べて、二町餘に渡せる橋見えたり。古人の語り傳へたる事もなし。古き記録にも載せず。是は何様龍宮城の道にてぞ有るらんと云ひ沙汰して、見る人日々に群集せり。又竹生島より箕浦迄、水の上三里、瑤瑤の如くなる切石を、廣き二丈許りに平に疊連れて、二河白道もかくやと覺えたる道一通り顯れ出でたり。是も如何様龍神の通路にてぞあらんとて、踏んで渡る人なし、唯あたりの浦に船を浮べて、見る人市の如く也。

鎌倉室町の世を通じて、此の如き思想が行はれてゐたのである。

勢多橋の南に橋姫の祠がある。之を龍王の女を祭つたものとして、俵藤太の龍宮談に附會せられた。もと橋の守護神で、水神の聯想から來たのである。昔、近江の佐々木氏や蒲生氏が此の橋を通る毎に、金の筭を一枚づゝ龍神への進物として水に投入れたといふ事を東海道名所圖會に載せてゐる。その近邊に秀郷の祠もあるが、此は餘程後に建立したものらしい。

三上山は野洲郡に在つて、鏡山の西に秀でた嶺である。元亨釋書には此の山の神を白小猿と云つてゐるが、傳説上では蜈蚣である。蜈蚣は大國主神の神話にも出てゐて、古くから知られてゐる。「むかで」の「むか」は手毎に相向ふ由を云つたものであらうと、新井白石は其の東雅に言つてゐる。大蜈蚣説はもとより國民の空想でもあるが、支那の書物には、「南方有大蜈蚣一丈餘。能啖牛。」とあり、「見下海中遠山羅列。如翠屏。而東西不定。是蜈蚣。」などともあつて、我が國でも暖國などには大蜈蚣の居る事を信じたのである。

最後に龍宮から將來した物に就いて述べて置かう。截つてもく盡きない巻絹だとか、思ふまゝに食物の湧き出る鍋だとか、幾ら取り出しても盡きない米俵とかいふのは、何れも説話の超自然的分子で、一寸法師の打出の小槌、雀の話の匏わづら、花咲爺の臼など皆其の類である。釣鐘が何故龍宮に縁があるのかは一寸考へにくい。併し文選東都賦の註を見ると、海邊に蒲牢といふ獸があつて鯨を畏れる、鯨が一撃すると、輒ち蒲牢が大に吼える、そこで鐘の頭に蒲牢を作る。撞木は鯨の状だと云ふので、鐘と海との關係がある。又鐘の紐とつてを龍頭といふのでも龍蛇との關係は否まれない。

之を要するに、蜈蚣退治の傳説は、素戔鳴尊の大蛇退治と、彦火火出見尊の海宮遊行との兩神話が結合して再生レプロデュースせられた觀のあるものである。國民の間に此の兩神話が記憶せられてゐなかつたら、此の傳説は到底成立たなかつたであらう。歴史上の勇者たる秀郷が、その武勇を崇拜せられたことが誇張せられた結果、傳説圏の主人公となつたのは、次に説く頼光と同様である。

二 源 頼 光

頼光が、保昌、綱、定光、季武、公時等と共に大江山の酒顛童子を平らげた傳説、又頼光が病中に土蜘蛛の妖怪を斬殺し、郎等が其の穴を發いて之を退治した傳説、尙又、綱が羅生門の鬼の手を取つた傳説は、いづれも頼光といふ人物を中心として、其の主従の武勇譚である。

凡そ此等の諸傳説を發生せしめた根源と思はれるのは、古今著聞集の鬼同丸の話であらう。同書武勇第十二の内に左の如き記載がある。

頼光朝臣、寒夜に物へありきて歸けるに、頼信の家ちかくよりたれば、公時とつてを使にて只今こそ罷過侍れ、此寒さこそはしたなけれ、美酒侍るやといひたりければ、頼信朝臣折ふし酒のみてあたりける時なりければ、興に入て只今見ん様に甲給へし、此仰殊おほによるこび思ひ候、御渡り有べしと云ければ、頼光則入にけり。盃酌の間、頼光廐の方を見やりたりければ、童とつてを一人いましておきたりけり、あやしと見て頼信にあれにいましておきたるものはたぞと問ひければ、鬼同丸とつてなりとこたふ。頼光驚ていかに鬼同丸などをあれていにはいまして置給たるぞ、なかしあるものならば、かく程あだには有まじき物なといはれければ、頼信實に

先づ鬼の棲處を丹波の大江山としてゐる。此は山州名跡志卷九葛野郡の條に、大枝山(或作大江)と見え、こゝに大枝坂(或作老)がある、山城から丹波に到る街道で、之を指すのであると云ふ。其の邊に酒吞童子の首塚とか、頼光の的場とか傳へてゐる故跡は夢中夢を説く類で、必ずしも信するに足りない。謠曲の花月の鬼が城は、丹波丹後の境とあつて別である。迷信の強い時代では、都に程遠からぬ山に悪鬼の棲んだのを信じてゐたのである。

次に頼光其の他の人々の事を一言しよう。頼光は清和源氏多田滿仲の子で、頼信の兄である。驍勇の譽が高かつた。随つて傳説圈の中心人物となつてゐる。源綱の祖仕は武藏守に任せられた。父の宛を箕田源次と云つた。箕田は武藏北足立郡にある。綱は源敦の養子となつた。養母が攝津渡邊に居たので、渡邊綱とも云つたのである。平貞道の事は、今昔物語卷廿五に、依頼信言平貞道切人頭語と云ふ話がある。傳へる所に據ると、碓氷峠に碓氷荒太郎橋貞道といふ者がある。上總に行つて頼光の館に

到り、頼光の臣となることを望み、家人となされて光の字を貰つて貞光と云つたと言ふ。季武も傳へる所に據ると、多田滿仲の家臣卜部季國の子で、勘當せられて伊豆に居たが、頼光の上總下向に際し、綱に取持たれて家臣となつたと言ふ。頼光が美濃守の時に、季武が膽だめしをした話は今昔物語に載つてゐる。公時に至つては頗る傳説的である。天延四年、頼光が上總の任が満ちて京に上るにあたり、足柄山にさしかゝると、赤色の雲がある。頼光が綱に命じて尋ねさせると、茅屋の内に六旬餘の老嫗が廿歳許の童子と唯二人居た。やがて兩人を頼光の前に伺候させた。老嫗の話す所では、此の山中に住む事數年、或時山頂に寢て、夢に赤龍と通じ、此の子を孕んだ、今や生れて廿一年を経たと。頼光は酒田公時と名づけて家臣とした。此は鷲尾經春の話に似た所もある。赤龍云々は漢高祖の故事の日本化したものとも考へられる。頼光が右の東國出身の郎等を大切に用つたことは、とにかく今昔物語にも見え、其の面々が手が利き、魂も太く、思慮もあるといふ風に同書に稱揚してゐるので、夙く武士崇拜

の時代思想が伺ひ知られる。保昌は位も四位で身分はよいので、勿論頼光の臣ではない。此の傳説圈に入つたのは、丹後守であつたのに附會したのである。一方に於て巨盜袴垂を威服した話が今昔物語にも出てゐる通りで、名望を繋いでゐた事が分る。

悪鬼討伐に就いて、頼光、保昌は八幡に社參し、綱、公時は住吉へ、定光、季武は熊野に參籠して願立をしてゐる。此は流石に我が敬神の國俗を顯してゐる一要素で、此の説話を物語る際には、逸すべからざる點である。

草子も謠曲も酒吞童子の身の上話を含んでゐる。草子では、

(一) 越後の山寺育ちの兒である。

(二) 比叡山に住んだが、傳教に追はれた。

(三) 大江山に住んで弘法に追はれたが、又立還つた。

とあり、謠曲では(一)と(三)との事がなく、(二)は委しくあつて、三十餘丈の楠とあつて奇瑞を見せたなどあり、而して、

(四) 酒を好いたので、眷族どもに酒吞童子と呼ばれた。

(五) 比叡山を出てから、彦山、大山、白山、立山、富士の御嶽を飛行の道に行脚して、大江山に籠つた。

の二件を加へてゐる。謠曲の方は著しく天狗思想を混淆してゐる。天狗は飛仙の類だが、鷲鳥が山伏的に人格化せられてゐるものと考へる。古來の學者は此の童子及び眷族を群賊として解釋してゐる。和漢三才圖會に寺島良安の書いてゐる所等は其の代表である。總て史實として解しようとするればこそさう云ふ説となる。民間に瀰漫してゐる思想は、「その丈二丈あまりにして、髪は赤く、倒に髪の間より角生ひて、鬚髯も眉毛も繁り合ひ、足手は熊の如くにて、」とある、その儘に見ておかなくてはなるまい。

抑、鬼に關する國民思想は多少の變遷がある。古史神話に現れた黄泉醜女(桃太郎の條參照)は暗黒界に於ける妖氛の如き物を惡神として具體化したのであらう。それを女性としたことが、後世の鬼女の思想の源泉とも考へられる。一體「おに」の語は隠か陰か何れかの漢字音の轉じたのであらうし、かたぐ今日民間で考へてゐる鬼はどうも國民の固有思想ではない。(支那で鬼といふのは、説文に「人所歸爲鬼」とい

ふので、死人の事である。)此は佛教から來たのが主である。佛説では、

- | | | | |
|--------|-----|--------|--------|
| | 炬口鬼 | 針毛鬼 | 得棄鬼 |
| (一)無財鬼 | 針咽鬼 | (二)少財鬼 | 臭毛鬼 |
| | 臭口鬼 | 大瘻鬼 | (三)多財鬼 |
| | | | 得失鬼 |
| | | | 勢力鬼 |

といふ風に三種九類の鬼を言つてゐる。(一々の意味は略する。)而して「諸鬼本處。瑛魔王界。從此展轉。散趣餘方。」とある、彼の八熱地獄や八寒地獄、牛頭馬頭の獄卒、赤鬼青鬼の事など、凡そ深刻な思想は、佛教方面から中古以來の凡俗を支配したので、往生要集や地獄草子はどれほど知識階級をも感化したか想像に餘りがある。それから鬼といふ語が物名に附加せられたり、鬼に關する諺も次第に出來た。皆瘳猛にして畏怖すべき意、醜惡にして嫌忌すべき意を以て、鬼を迎へるに至つたのである。冥府や鬼神は唯り東洋ばかりではない。希臘羅馬の神話や北歐の神話に於ても、ニードレゴットハイテン低級神格としての鬼がある。

(ろ) 羅生門

羅生門の鬼の事は、劔卷(參考源平盛衰記の首卷にある)の一條堀川尻橋もとりはしの鬼女の事から變遷したものに違ひない。同書に、

滿仲、鬚切、膝丸二の劔を持って、天下を守護し給けるに、靡かぬ草木もなかりけり。角て嫡子攝津守頼光の代と成て、不思議様々多かりけり。中にも一の不思議には、天下に人多く失る事あり。死ても失せず、座敷に連て集り居たる中に、立とも見えず、出るとも見えずして、搔消様にぞ失にける。行末も知す、有所も聞ずありければ、怖しと云計なし。上一人より下萬民に至まで、駭恐る、事申に及ばず。

とあつて、宇治の橋姫の來歴に及び、凄慘な記事がある。それから尻橋の鬼女の事となる。

其比攝津守頼光の内に、綱、公時、貞道、末武とて四天王を仕はれけり。中にも綱は、四天王の隨一なり。武藏國美田と云所にて生れたりければ、美田源次とぞ申ける。一條大宮なる所に、頼光聊用事ありければ、綱を使に遣さる。夜隠に及びければ、鬚切を帶せ、馬に乗せてぞ遣しける。彼處に行て尋、問答して歸けるに、一條堀川の尻橋を渡りける時、東の爪に、齡廿餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて、誠に姿麗なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帶の袖に、經持て、人も具せず、只獨南へ向てぞ行ける。綱は橋の西の爪を

過けるを、はた／＼と叩て、^何何地へおはする人、我らは五條互に侍る、顔に夜深て怖し、送て給なんやと馴々しげに申ければ、綱は急ぎ馬より飛下り、御馬に召れ候へと云ければ、悦しくこそと云間に、綱は近く寄て、女房をかき抱て、馬に打乗せて、堀川を東の爪を南の方へ行けるに、正親町へ今一二段が程、打も出ぬ所にて、此女房後へ見むきて申けるは、誠には五條互には指たる川も候はず、我住所は都の外にて候也。其送送て給なんやと申ければ、承候ぬ、何く迄も御座所へ送進せ候べしと云を聞て、頓て^い驚しかりし姿を替て、恐しげなる鬼に成て、いざ我行處は、愛宕山ぞと云儘に、綱が鬘を囓て提げ、乾の方へぞ飛行ける。綱は少も騒がず。件の鬘切をさつと抜、空様に鬼が手をふつと切。綱は北野の社の廻廊の屋の上に、どつとおつ。鬼は手を切られながら愛宕へぞ飛行。さて綱は廻廊より跳下て、雲に附たる鬼の手を取て見れば、雪の貌は引替て、黒き事限なし。白毛隙なく生繁り、銀の針を立たるが如くなり。是を持って参たりければ、頼光大に驚給、不思議の事なりと思給、晴明を召とて、播磨守安倍晴明を召て、如何あるべきと問ければ、綱は七日の暇を給て、慎べし、鬼が手をば能々封じ置給べし、祈禱には仁王經を講讀せらるべしと申ければ、其儘にぞ行はれける。

此が、綱が鬼女の手を切り落した武勇譚である。さるほどに、

既に六日と申ける誰かれ時に、綱が宿所の門を敲く、何くよりと尋ねれば、綱が養母渡邊に在けるが、上りたりとぞ答ける。彼養母と申は、綱が爲には伯母なり。人して云は、悪様に心得給ふ事もやさて、門の際まで立出て、適の御上にて候へ共、七日の物忌にて候が、今日は六日に成ぬ。明日計は、如何なる事候とも叶まじ。宿を召され候べし。明後日に成なば、入進らせ候べしと申ければ、母は是を聞て、さめ／＼と打泣て、力及ばぬ事共なり、去ながら和殿を母が生落し、より請取て、養そだてし志、いか計とか思らん。夜とて安く寝もせず、濡たる所に我は臥、乾ける所に和殿を置、四や五に成までは、荒き風にも當じとして、いつか我子の成長して、人に勝れて好らん事を、見ばや聞ばやと思つ、夜晝願し甲斐ありて、攝津守殿御内には、美田源次と云つれば、肩を雙ぶる者もなし。上にも下にも譽られぬれば、悦とのみこそ思つれ。都鄙遠道の路なれば、常に上る事もなし。見ばや見えばやと、戀しと思ふこそ親子の中の歎なれ。此程打續夢見も悪く侍れば、覺束なく思はれて、渡邊より上たれ共、門の内へも入られず、親共思はれぬ我身の子と戀きこそ慕なけれ。綱は道理に責られて、門を開て入にけり。母は悦て、來方行末の物語し、さて七日の齋と云つるは、何事にて在けるぞと問ければ、隠すべき事ならんれば、有の儘にぞ語ける。母是を聞、扱は重き慎にて在けるぞや。左程の事とも知ず、恨けるこそ悔しけれ。去ながら親は守にて有なれば、別の事はよも非じ。鬼の手と云なるは、何なる物にて有やらん、見ばやとこそ申されけれ。綱答云、安事にて候へ共、固く封じて侍れば、七日過では叶まじ。明日暮て候ば、見参に入候べし。母の云、よし／＼扱は見ずとも、事の關べき事ならず、我は又此曉は夜を籠て下るべしと、恨顔に見えければ、封じたりつる鬼の手を取出し、養母の前にぞ置たりける。母打返々々是を見て、穴怖や、鬼の手と云物は、懸る物にて在けるやと云て、さし置く様にて、立さまに、是は我手なれば、取ぞよと云儘に、恐しげなる鬼に成て、空に上て破風の下を蹴破て、^{そら}虚に光て

失にけり。其よりして渡邊黨の屋造には、破風を立す、東屋作にするとかや。綱は鬼に手を取返されて、七日の齋破と云共、仁王經の力に依て、別の子細なかりけり。此鬚切をば鬼の手切て後鬼丸と改名す。

此が、綱館の段である。又太平記卷卅二に鬼丸の由來を述べた一條があるが、前者と異同がある。表示すると次の如くである。

説話の要素

劍卷

太平記

鬼女の出た所

一條戻橋

大和宇多郡の大森

鬼の去つた所

愛宕山

虚空

綱が空から落ちた所

北野神社の廻廊の屋上

不明

トつた人

晴明

たゞ占夢の博士とある

物忌

仁王經讀誦

宿直養目

鬼の再來

渡邊なる養母に化ける

高安なる頼光の母に化ける

鬼の正體

おそろしげな鬼となる

長二丈許の牛鬼となる

鬼切の折れること

此の事について格段の記載が無い

鬼切の録つぎ五寸折れる、横川僧都覺蓮に祈請せしめ、俱利伽羅の靈験で、録が元の如くに直る

さて戻橋の事は、山州名跡志に委しく出てゐる。傳へる所に據ると、安倍晴明が十二神を咒し置いた所で、又橋占はしうらを問ふ所ともなつてゐた事は源平盛衰記を見ても分る。一體此の橋がさう云ふ怪異に關係して居るので、鬼女の傳説が結び附くに至つたものと考へられる。

鬼が美女となつて、人の馬に乗り、しばらくして正體を現して飛去つたといふ筋を、他の方面から探索すると、狐の説話として存するものがある。それは今昔物語卷廿七の高陽川狐變へ女乗マ馬尻マ語である。又橋の上に鬼女が出た話としては、やはり同書同卷の近江國安義橋鬼噉へ人語を逸してはならぬ。此の説話は、

- 一、男が橋上で鬼女に會ふ。
- 二、鬼の祟を怖れて物忌する。
- 三、鬼が男の弟に化けて來る。(男が昨殺される)

と云ふ形式だから、戻橋のと類似してゐる。此の説話は怖らく綱の關係があらう。

安義橋の鬼の如き地方的古話が、いつしか頼光を中心とした傳説圈に融合せられたと見えるからである。それから鬼の手を取るのも、今昔物語卷廿七に獵師母成鬼擬レ噉レ子語に同じやうな事がある。鬼女を信じた時代は、云はゞ民衆が意氣地がなくなつたので、甚だしく勇士の剛膽を稱揚し、他面に於ては神佛の加被を祈ると共に陰陽道に縋つたのであつた。丁度さう云ふ時世に斯道の名家安倍晴明が出たので、晴明其の人にも亦不思議な傳説が結合してゐる。それは淨瑠璃の蘆屋道満大内鑑で世人の知る所である。

鬼が渡邊なる養母に化けて來たといふ方は、太平記に頼光の母儀に化けたとあるりも尤らしい。又此の鬼を酒顛童子の乾兒こぼん茨木童子としてゐて、演劇にもある。太平記には牛鬼の話が見えるが、古風土記逸文にある尾張國の古傳にも、顔が牛の如き怪物が出て夥しく笑つてゐるのを、石津田連が一々斬つたといふ話がある。此ういふ思想も民衆の間に存してゐたのである。

戻橋傳談の末段は、一面に於て渡邊黨の家作の由來に對する説明的傳説となつてゐる事も見逃してはならぬ。

戻橋は場所を更へて、後には羅生門となつた。謠曲の羅生門がそれである。羅生門は元來平安城外門の一つで、内裡南方の正面である。東寺羅生門といふのは、後に東寺觀音堂に移されたからである。羅生門に就いてもいろ／＼な怪異が傳へられて居た。玄象といふ琵琶の名器が失せたが、それは羅生門の鬼が取つて居たといふ話や、盗人が羅生門の上層に上つて見たら、死骸が澤山遺棄してあつたといふ話が今昔物語にある。都の真中でありながら、此の門が頗る物騒な所となつてゐたのは、意想外な事である。戻橋の話が又いつしか羅生門に轉じたのも無理は無い。

(は) 土蜘蛛

土蜘蛛退治の事は、劔卷の一條戻橋の鬼の條の續に、次のやうに見えてゐる。

同年の夏の比、頼光癩病を仕出し、如何落せ共落す、後には毎日に發ふけり。發ふねれば頭痛く、身發熱、天

にも着すもにつかず、中にうかれて惱まれけり。加様に逼迫する事、三、餘日にぞ及ける。或時又大事に發て、少し減に附て、醒方に成ければ、四天王の者共看病しけるも、皆閑所に入て休けり。頼光少し夜深方の事なれば、幽なる燭の影より、長七尺許なる法師、する／＼と歩依て、繩をさばきて頼光に附んとす。頼光是に驚て、がはと起き、何者なれば、頼光に繩をば附んとするぞ、悪き奴哉とて、枕に立て置れたる膝丸おつ取て、はたと切。四天王共聞附て、我も／＼と走寄、何事にて候と申しければ、しか／＼とぞ宣ける。燈臺の下を見ければ、血こぼれたり。手々に火を炬て見れば、妻戸より簀子へ血こぼれけり。此を追行程に、北野の後に大なる塚あり。彼塚へ入りたりければ、即塚を掘崩して見るに、四尺許なる山蜘蛛にてぞ有ける。搦て参たりければ、頼光安からざる事かな、是程の奴に誰かされ、三十餘日惱さる、こそ不思議なれ。大路に曝すべしとて、鐵の串に指し、河原に立てぞ置ける。これより膝丸をば蜘蛛切とぞ號しける。

右の外に参考となるのは、土蜘蛛草子と謠曲土蜘蛛である。殊に謠曲の方で注目すべきは、單に山蜘蛛でなく、葛城山に年を経た土蜘蛛の精魂としてゐる事である。

大蜘蛛の話は支那にも古くからある。即ち、
相傳。裴旻山行有山蜘蛛。垂絲如匹布。將及旻。旻引弓射却之。大如車輪。
因斷其絲數尺。收之。部下有金瘡者。剪方寸。貼之。血立止。(酉陽雜俎)

とある。此の裴旻の説話の如きは又山蜘蛛退治と見てもよい。蜘蛛の變化譚も次のやうなのがある。

江夏城南有鐵佛寺。世傳唐時有紅白二蛛。化爲妖婦。以媚人。故鑄鐵佛以鎮之。
(江夏志)

之を要するに、土蜘蛛退治は、たゞ蜘蛛の怪異と勇士の武勇談とだけではなく、神武天皇東征のをりの土族征討の如き古き國民的記憶も説話構成の誘因となつてゐる。而して、六道の繪の畜生道の分に、大なる土蜘蛛を葛の綱で縛つたのがあると、塵添蓋囊抄に見え、又、デーノンハルトの著に、新メキシコの印度人の話に、タランテルと稱する毒蜘蛛を退治した話が紹介せられてゐるのを見ると、我が國ばかりの傳説でもない。

(乙) 人神偶會傳説

一 浦島

浦島傳説の資料は頗る多い。日本書紀卷十四、雄略天皇二十二年秋七月の事としてあるのが古い。此の古傳の詳密で信憑すべき徵證は、釋日本紀所引丹後國風土記の文である。長いから此處には引かぬ。次に参照すべきは萬葉集卷九の詠「水江浦島子」一首並短歌である。その作者は傳つてゐない。又浦島子傳及び續浦島子傳記（共に群書類從卷百卅五所收）といふ漢文がある。その他扶桑略記や水鏡にも載つてゐる。純文學としては、室町時代に入つて、御伽草子の浦島太郎、謠曲の浦島となつて顯はれた。江戸時代以後にも文學的作意を加へたのが頗る多い。

扱今日兒童は多く國定小學讀本から、此の傳説の知識を得てゐるから、それを標準とするのが至當である。其の要領は次の七個條となる。

- 一、浦島太郎と云ふ人があつた。
- 二、龜を助けた。
- 三、龜が恩返しとして、浦島を海底の龍宮に伴れて行つた。
- 四、龍宮には乙姫が居て、浦島を歡待した。

五、浦島は何となく歸思を生じた。

六、乙姫は離別の形見として、浦島に玉手箱を與へ、蓋を開くなと誓約した。

七、浦島は歸つて來て見ると、父母も故舊もない。哀痛の餘り、誓を破つて玉手箱をあけると、白煙がたなびいて、見るまに老衰した。

以下右の各要素に就いて解説して行かう。

先づ浦島は何處の人か。書紀には丹波國餘社郡管川村の人とし、風土記も與謝郡日置里筒川村としてゐる。今の丹後宮津から八里程距つた地である。浦島子傳には水江浦としてゐる。水の江といふのは竹野郡網野村の淺茂川の口なる小淡水湖で、萬葉集の歌の澄江浦といふのもそこである。浦島の氏族はといふと、日下部首等の先祖であると云ふ。其の名は島子であるらしい。本來、水の江の浦の島子といふべきを浦島の子と言つてしまつたらしい。御伽草子に至つて甫めて浦島太郎となつた。浦島の生活は、鯉釣り鯛釣る漁夫といふのが古意を得たもので、續浦島子傳記に上古仙人也とあるのは潤色の嫌がある。其の風姿は、風土記に、姿容秀美、風流無類とある。浦島が

出發した年代は、風土記には雄略天皇の御宇とし、書紀には其の廿二年となつてゐる。其の頃の事として傳承せられたものと見える。

次に龜の事である。(萬葉には龜の事は無い。)一體龜を助けて福德を得る事は、釋景戒の日本靈異記に、贖_レ龜令_ニ放生_一。得_ニ現報_一縁といふ話がある。放生は主に佛教の殺生戒から來た考で、石清水放生會の起りが、元正天皇の養老四年だといふ事を思ひ合せると、民間にかなり古くから存する思想である。今昔物語には印度の事として、同型の類話がある。卷九の□(闕)人以_ニ父錢_一買_ニ取龜_一放_レ河語といふのである。尙二個の類話が載つてゐる。晋の陶潜の搜神後記の毛寶の話も、龜の報恩談である。

龜が化して女となる事は、萬葉を除いて、皆之を説いてゐる。蓋し物が變じて人となる話は種々ある。吉野山の仙女が、柘(桑の類)の枝に化して、味稻と云ふ人の梁に止り、遂に本身を現して、其の妻になつた故事は、懷風藻の詩にも見えてゐる。嬉遊笑覽に出てゐる瓜姫の話も柘媛に似てゐる。御伽草子の蛤の草紙も亦同様の趣がある。

爰に旁證となるのは、支那の古話である。晋の干寶の搜神記卷十九に、

滎陽人張福船行還。野水邊夜有二女子。容色甚美。自乘小船來投福云。日暮畏

虎。不敢夜行。福云。汝何姓作此輕行。無笠雨駛。可入船就避雨。因共相

調。遂入就福船。寢以所乘小船繫福船邊。三更許。雨晴月照。福視婦人。乃

是一大鼉。枕臂而臥。福驚起欲執之。遽走入水。向小船是一枯槎段長丈餘。

とある。浦島の方は初に龜として現れ、後少女と化するのであるが、此の方は女として人に會ひ、後鼉(蜥蜴に似た水族)の正體を顯してゐたのである。説話の内容に共通の點がある。お伽草子の浦島太郎では、一女子が船に乗つて漂着することゝし、龍宮で訣別の際、龜であると告白してゐる。現行の童話はそれとは違ひ、龜はやはり龜として再び浮んで來て、その背に浦島を乗せて龍宮に伴なふのである。龜の甲に乗るといふ思想も古く存する事で、古事記の神武天皇御東征の所に、宇豆毘古といふ人が龜に乗つて釣をして居り、海路の案内者となることが見えてゐる。

少女の事は風土記の文に、其容美麗更不可比。とあるだけだが、浦島子傳には「鈿映海上。花貌耀船中。」といひ、芳顔薫體克調。不異楊妃西施。と頗る文飾をらしてゐる。續傳は尙更で數十字を列ねて形容してゐる。

浦島と少女との二人の交渉は、風土記を見ると、嶋子、女を見て怪しみ問ふと、女はほゝゑんで、風流の士が海に泛んでゐる、なつかしさに天降つたと答へる。嶋子が更に素性を問ふと、天上仙家之人也と對へ、偕老の樂をしたいと嶋子を促すので、女子の方に愛情の萌した趣になつてゐる。此は説話構成上注目すべき筋である。壯麗な男子が龍宮からみいられると云ふ思想は古く存在する所で、彼の源氏物語須磨の巻に、「海の中の龍王の、いといたう物めでするものにて、みいれたるなりけり云々」とあるのを思ひ合せる。朝鮮にはその反對に、美人が龍神に掠められる話があつて、僧一然の三國遺事にある。それは水路夫人の事である。

浦島が龍宮への途上は、風土記には同船して行く事とし、女娘、嶋子に眼を睡らし

めるとある。その間は頗る急速で、續傳には、一時眠之内。濟萬里波上。といつてゐる。これは古意を傳へてゐると思ふ。

次に本傳説の中心思想たる龍宮談に入らう。現行の説話では海底の龍宮と云つてゐる。(龍宮も畢竟上代のわたつみの神の宮の考の少しく變つたものである。それらの事は前の海宮や俵藤太の條下にも述べて置いた。)日本紀には、蓬萊山の字が見え、風土記にも蓬山とある。(海中博大之島とも云つてある。)'とこよのくに」とは和訓である。萬葉のはさすがに海若神之宮である。風土記や浦島子傳にはその境域を絢爛の文辭を以て形容してゐる。即ち「其地如敷玉。闕臺暎映。樓臺玲瓏。目所不見耳所不聞。」と云ひ、「金精玉英敷丹墀之内。瑤珠珊瑚滿玄圃之表。」と云ふ類で、全く支那思想の影響である。抑、支那神仙説は奈良朝以後殊に國民に深い印象を與へてゐる。莊子に、藐姑射山の事があるが、その影響として、萬葉集卷十六に、「心をし無何有の郷に置きたらば、藐姑射の山を見まくちかけむ」の歌が有るのでも分る。列子湯問篇

に、八紘九野の水、天漢の流が注いで無増無減である無底の大壑たる歸墟の中に、岱輿、員嶠、方壺（一曰方丈）、瀛洲、蓬萊の五山のあることを述べ、其の山の模様を、「其上臺觀皆金玉。」とか、「珠玕之樹皆叢生。華實皆有滋味。食之皆不老不死。所居之人皆仙聖之種。」とか、「使巨鼈十五舉首戴之。」とか言つてゐる。漢の東方朔の著だと云ふ海内十洲記には列子の五山が十洲に殖えてゐる。晋の王嘉の拾遺記に至つては、益、想像の博大、辭様の豊麗を致した。蓬萊仙島説は此等に悉されてゐる。大分後ではあるが、蓬萊島を歌詞に蓬が島といふことも起つて、爲家の「わたつ海のしらぬ浪間にすむ龜のよもぎが島も君がためとぞ」といふのがある。蓬萊と龜との關係も支那思想である。竹取物語に見える蓬萊の玉の枝の事はもとより、降つて謠曲の鶴龜に禁廷の莊嚴を言つたのは蓬萊の類推から來てゐる。風土記や浦島子傳に支那神仙説の混入してゐるのは決して看過すべからざることである。

それから乙姫の事に及ぶ。（現行童話では龜と乙姫とを別々にしてゐる。）乙姫の乙は兄弟の弟の意で、乙若、乙御前などの用例の乙である。古傳は皆龜即ち女に化すと云つて、風土記には龜比賣とあり、浦島子傳には仙女とある。風土記を見ると、浦島は女の父母に紹介せられ、百品の芳味を薦められ、同胞隣里歌舞宴樂の興をするのを見、更に人神偶會の縁によつて、夫婦の理をしたとある。此も亦注意すべき一要素である。蓋し人間が神女に配するといふのは此の説話の焦點である。浦島子傳には、一个の漁夫たる浦島を全然神仙中の物としてしまつてゐる。即ち「島子與神女共入玉房。薰風吹寶衣。而羅帳添香。紅嵐卷翡翠。容帷鳴玉。金窓斜素月。射幌。珠簾動松風。調琴。朝服金丹石髓。暮飲玉酒瓊漿。千莖芝蘭駐老之方。百節菖蒲延齡之術。」といふ類である。

歡樂の地、神仙の境に淹留した浦島は漸く歸思を生ずるに至つた。其の間の消息は風土記には此うある。浦島は仙都に遊んで三歳を過した。處が懷土望郷の心を起し、二親を戀うて嗟歎するに至つたので、女娘が其のわけを問ふと、浦島は暫く本俗に還

つて二親を拜さうと云ふ。そこで兩者の訣別となるのである。萬葉の歌にも此の趣が傳へられてゐる。此も亦要點である。即ち浦島の考では、一時歸郷して再び龍宮に歸つて落ち着かうといふのであつた。歡樂の巷から郷里を戀ふるに至つたのは、所謂歡樂が極つて哀情が生じたのである。龍宮の悠長で變化の無いのよりは、やはり人間世界の複雑窮無く、血も涙もある方がよくなつたのである。理想郷もよいが、どうも現實界の執着は捨てられぬといふのである。坪内逍遙氏の新曲浦島は此の點に重きが置いてあるやうだ。そこでいよいよ離別となる。その愁嘆場は、風土記も續傳も能く寫してある。御伽草子の方も時代思想が現れてゐる。乙姫が別離の記念として玉手箱を浦島に與へる。これはいかにも不自然でない。前の海宮神話には滿珠干珠の事がある。こゝに思ひ當るのは、搜神記卷十六の生者と亡靈との契合を言つた(鬼人結合説話とでも名づけよう。)話で、吳王夫差の女紫玉と童子韓重とに係るものである。これにはいかにも浦島めいた所がある。それは紫玉が韓重に、夫婦の禮を盡した後に明珠を贖にし

てゐるのである。浦島の玉手箱の方は、玉はもとより美稱で、箱が主である。玉手箱は、

玉匣(風土記、浦島子傳、續傳、扶桑略記、古事談) 簞くしび 玉たま 匣はこ(萬葉集) 一宮(日本後記) 玉の箱
(水鏡) 美しき宮一つ(御伽草子) 玉手箱(謠曲)

などいろ／＼に書いてあるが、古語では玉くしび、後世の語では玉手箱である。蓋を開くなど誓ふのは果して何の意であらうか。萬葉には「妹がいへらく、とこよべに復かへりきて、けふのごと、會はむとならば、この簞開くなゆめと」と約したとあり、浦島子傳にも、「誠ニ島子ニ曰。若欲見ニ再會之期。莫開玉匣之緘。」とある。古意を傳へたものに相違ない。即ち蓋のしてゐるのは、蓋が函に合つてゐるので、蓋を取れば函にあはないのである、兩者が分離するのである。此のあふ、あはないと云ふことを箱を借りて具體的に譬へたので、上代人の用ゐた一種の語戲ではないかと愚考する。(結果から見ると、箱が生命の護符クリスマンとなつてゐると考へられぬでもない。)といふのは、元來玉くしびは、枕詞として用例の存する語で、「玉くしびあけまく惜しきあたら夜を衣

手かれて一人かもねむ』はしきやし吹かぬ風故玉匣開きてさねしあれぞ悔しき」などと萬葉にあつて、「あく」開く」の動詞に係つてゐる。而してあけるのが惜しいとか、開いて悔しいとか云つてゐるのであるから、あけて悔しき玉手箱といふ語路の發生は當然である。

龍宮からの歸途は、風土記には、相分れて乗船し、眼を睡らしめられて忽ち郷に到るとある。現行説話では、やはり亀が送つて來るのである。歸郷して見ると、人物遷易して三百歳を経てゐた。茫然自失、玉匣を撫で、再び前の神女を思ひ、誓約を忘れて、匣を開くと、白雲（若しくは紫烟）が出て、忽にして花芳しき姿は亡くなつたのである。萬葉には死んで了つたとある。現世を懐かしがつて仙郷から歸つたもの、事志と齟齬するや、再び榮華の夢の國を慕ふのは、亦人情の當然である。何故に箱をあけたのか、風土記では、殆ど無意識の舉動として書いてある。萬葉では、箱をあけて見たなら、元の如く家があらうかと思つてあけたと、意識的の舉として傳へてゐる。

蓋の合つてゐる間は龍宮との縁が繋がつてゐるが、あけてしまへば縁が切れる。龍宮との縁のある間は、若やいでゐるが、縁が切れれば衰老一時に來る次第である。説話の形式上一般に契約破棄を以て破綻カクストロフエの原因としてゐるのは、鶉羽神話や安達原傳説でも皆同じ事である。

浦島傳説の類話は、今昔物語卷二の釋種成ニ龍王聳ニ語、同書卷十六の仕ニ觀音ニ人行ニ龍宮ニ得ニ富語はそれである。前者は印度の事で、池に住む龍女が人に化して、釋種の男に近づいて龍宮に伴なふ。後、男は本土に歸る事となり、龍女は餞するに、玉の箱の中に、劔を錦に包んだのを入れて送つた。男は歸り來つて國王となり、龍女を后として迎へ取つたが、龍女は閨中でその正體を現したといふ説話である。それから後者は我が國の事で、京の若い男が、觀音參詣の砌、人の蛇を持つてゐるのを乞ひ取つて放生した。すると蛇は十二三ばかりの美女に化して池邊に伴なひ、眼を睡らしめて、七寶莊嚴の龍宮に誘つた。六十ばかりの親即ち龍王が出て、おと子なる女の童わらわが人に

殺される所を助けられた御禮にお迎へしたのだと言つて款待し、塗箱を贈つた、中には金の餅の片われが入つてゐた。男は歸來其の金の餅を入用の物に代へつゝ、一代繁昌に暮したといふ筋である。之には佛教思想が混入してゐる。

支那の浦島式説話は多くは神仙説であつて、國民性が最も能く反映せられてゐるものである。太平廣記所載杜陽編の元藏幾の話は、海島の仙郷に漂着し、淹留して故國に歸つて來ると、世代が頗る推移してゐたといふので、純然たる浦島式である。搜神後記の袁相、根碩二人の話では、仙郷が洞穴である。太平廣記所載神仙記の劉晨、阮肇二人の話は、天台山に入つて二女子に偶會した。半年の淹留が其の實十世を経てゐたとある。其の他述異記にある王質の爛柯の故事や、有名な武陵桃源の故事などは、何れも浦島式傳説の種々な形を示してゐる。

蓋し浦島式傳説は其の分布の範圍が頗る廣く、世界的傳説と云ふべきものである。上代人が此の人間界以外に龍宮とか仙郷とかの存する事を想像してゐた結果に成つた

説話で、偶然ながら此の土から彼へ交通し、所謂人神偶會の喜をなすのである。而して再び此の土に歸つて見ると、彼の三年は此の三百年に當つてゐると云ふやうに時日の差を語るのが大きな筋である。人神偶會の要素の無い話でも、仙郷、他界の時間の経過が、人間界よりは大に緩慢だといふ方は多くの類話に共通してゐる。ケルト起原のライス、レウエリンの話では侏儒の群で舞蹈したのは僅五分間と思つたのが、一時間経つてゐた。ギットーパツハの話では一日経つたと思つたのが、二年も過ぎてゐた。類話中の人物は漁夫もあるが、農夫や、鍛冶職や、牧羊者もあり、隨つて場所もいろいろである。又破綻に終らずして、幸運を齎らすものもある。ポヘミヤのプラニツク山下に高樓がある、此の館に聖王ウエンチエルが騎士と共に睡つてゐる。その近くの鍛冶屋が草を刈つてゐると、見知らぬ人が來て、一寸來て貰ひたいと言つて山につれて行かれた。さうして蹄鐵の修理を頼まれた。その報酬に古い蹄鐵を貰つて歸つて來ると、一寸の間に一年経つてゐた。袋の中の蹄鐵は豈圖らんや金塊であつたといふや

うな話もある。今昔物語の金の餅に似てゐる。

二 羽衣

羽衣傳説は今日多く謠曲羽衣によつて世人に了解せられてゐる。(併し後に説明する如く、謠曲では此の傳説が、原型よりは頗る發展して文學的となつてゐる。)故に一先づ之を標準として解説しようと思ふ。説話の要領は略、左の如くである。

- 一、白龍と云ふ漁夫が、三保の松原で天人の羽衣を得た。
- 二、天女が来て、羽衣が無くては、天上に歸られないから、返して貰ひたいと乞ふ。
- 三、漁夫は天人の舞樂を所望して羽衣を返す。天女は霓裳羽衣の曲をかなで、昇天した。これが東遊の駿河舞の起源である。

先づ天上界、天女、羽衣の順序で考へて見よう。此の天上界は月の都を指したもので、謠曲では月宮殿といつてゐる。起世經に、

佛告比丘。月天子宮殿。縱横正等四十九由旬。四面垣牆。七寶所成。月天宮殿。純以天銀天青瑠璃。而相間錯。二分天銀清淨。無垢光甚明曜。餘一分天青瑠璃。亦

甚清淨。表裏映徹。光明遠照。亦爲五風。攝待而行。亦云於此月殿。亦有大輦。青瑠璃成輦。高十六由旬。廣八由旬。月天子身與諸天女。住此輦中。以天種々五欲功德。和合受樂。隨意而行。月天子身壽五百歲。子孫相承。皆於彼治。

とあつて、月天子、諸天女の事も説いてある。さうして此の如き天人も尙命數の盡きる時があるのは、往生要集に、「如彼切利天。雖快樂無極。臨命終時。五衰相現。一頭上花鬢忽萎。二天衣塵垢所著。三腋下汗出。四兩目數眵。五不樂本居。是相現時。天女眷屬皆悉遠離。棄之如草。偃臥林間。悲泣矣。」とあるのでも分る。それから天人の羽衣は、長阿含經に、「四天王身長半由旬。衣長一由旬。廣半由旬。衣重半兩矣。」とある。以上何れも印度思想である。それから天の羽衣の佛説は和歌に引かれて「君が代は天の羽衣まねにきて撫づともつきの巖なるらん(詠人不知)」とか、「動きなき巖の果も君ぞみんをとめの袖の撫でつくすまで(清原元輔)」とか云ふ類がある。此も亦、瓔珞經に、「譬如一里石乃至十里石。方正等。以淨居三銖衣。三年一拂。盡此石。

名「一小劫」矣。」とある如きに基づいてゐる。此の種の佛説が中古以來の人心を支配したことは實に甚だしいものである。

月世界に對する支那思想も佛説に近似したものがあつた。月宮殿を廣寒清虛之府と言ふのは唐の明皇の故事で、異聞實錄（事類統編所引）や龍城錄に見えてゐる。素娥十餘人、皓衣を着、白鸞に乗り、大桂樹下に舞ふなどと書いてある。又此の月中の桂樹は酉陽雜俎に、高さ五百丈と云つてあり、而も西河の人吳剛が仙を學んで過があり、謫せられて其の樹を伐らしめられてゐると傳へてゐる。此の桂の事を佛説では、須彌山の南に大閻浮樹があつて、高さが四千里である。其の影が月に映るので、月中に桂があつたのではないなどとも言つてゐる。とにかく右に述べたやうな東洋思想が、夙に我が思想界を風靡し、其の影響として竹取物語の如き文學を産出したのである。月の都、天人、羽衣の思想は此の赫哉姫の物語に巧妙に融會せられて居る。謠曲羽衣の生れたのは決して偶然ではない。

次に天人の舞樂の事である。雜阿含經に六天女が虚空を凌ぎ行き、清琴を彈奏するとある。此の佛教思想は寺院の欄間の彫物や、壁畫などで能く世人の目に觸れてゐる。前に述べた唐の明皇の故事にも月宮の天女の舞を言つてゐる。我が國では昔新嘗祭（今日では大嘗祭だけとなつてゐるが）に行はれた五節の舞姫の起りが即ち天女の舞である。其の由來は公事根源に言つてあるが、本朝月令や江次第を引いて政事要略に書いてあるのは、

相傳曰。天皇（天武）御吉野宮。日暮彈琴有興。俄爾之間。前岫之下。雲氣忽起。疑

如高唐神女。髣髴應曲而舞。獨入天囑。他人無見。舉袖五變。故謂之五節。一

で、「歌にをとめどもをとめさびすもからたまを袂にまきてをとめさびすも」とある。謠曲の吉野天人は此の傳説を脚色したものである。僧正遍昭が「天つ風雲の通路吹きとちよ云々」と歌つたのは、五節の舞姫を天女に譬へたのである。

能因法師が三島明神に東遊を奉納した時、巫女を天女に喩へて、「うど濱に天の羽衣

昔きてふりけむ袖や今日のはふりこ」と云つたのは、範兼の童蒙抄に、「昔駿河國の有度濱に、神女あまくだりて、舞ひあそびしをうつして、今の世には駿河舞とて、東遊にする也。」とある故事に據つたもので、此が謠曲羽衣の三保松原の方に縁が近い。體源抄や續教訓抄の文面では、天女の天降は安閑天皇の御宇で、老翁が忍び隠れ乍ら見たとある。久能山縁起には、老翁を伶人稻川太夫と云つてゐる。

霓裳羽衣の曲といふのは玉樹後庭花といふ支那樂である。東遊は又東舞とも云つて、三代實錄、貞觀三年三月十四日、東大寺大佛供養の折に行はれたのが最も古い。東遊歌圖は群書類從管絃部に入れてある。

一體謠曲羽衣は、天女天降の説話を經とし、舞樂の起源を説く所の説明傳説を緯として組立てられ、種々な東洋思想が融合してゐるものである。その本幹たる要素は、天女天降の一條である。淺井了意の東海道名所記に、

又この松原(三保)に、羽衣の松とて、楡ひいで、たかき松一本あり、むかし天女あまくだりてあそびしに、

羽衣をかの松にかけおきけるを、獵師これを取れて返さず、力なく獵師が妻になりて、賤がふせやに日を送りけるが、ある時夫の出たるあひだに、羽衣をとりて天上にとびさりけりといふ。

とあるのは最も注目すべき筋である。此は怖らくは民間口碑のまゝを採つたらしい。

羽衣を取られて、漁夫の妻となり、後、夫の不在中に、それを取返して昇天するといふのが説話の原型である。此ういふ筋の古傳は、帝王編年紀養老七年の近江の伊香小江(余吾湖の古名)の羽衣説話である。その要點は、

- 一、八天女、白鳥となつて天降り、水浴する。
- 二、男、之を見て神だと思ひ、愛で、白犬をして弟女の羽衣を盗ましめる。
- 三、七兄女昇天する。
- 四、弟女は飛び去り得ずして、民となり、男と婚する。
- 五、二男二女が生れる。
- 六、母は羽衣を捜し取つて昇天してしまふ。

といふのである。就中、天女が白鳥となつて水浴する點の明白なのは、最も特徴としなければならぬ。故栗田寛氏の古風土記逸文考證に引いてある雜和集には、右の話に棚機

説話が加味せられて居る。牽牛織女の事は全く支那思想である。丹後風土記には比治の里の眞井の羽衣傳説が載つてゐる。尙、河内名所圖會の交野郡天川、羽觀跡開老志の遠田郡天女墳等類話は少からず存する。

之を要するに、羽衣傳説は、廣義に解すると、海宮神話や浦島傳説と共に、人と超人との偶會を語つてゐる。伊香小江の羽衣説話では、天女が白鳥に化して下つたとある。此は考へやうによると、白鳥が女性に化して人間に近づいたとも言へる。浦島などでは、人間界から他界に遊行し、神女に慕はれて契り交すが、これは却て下界に淹留して契を結ばせられるので、相反する筋から成つてゐることは一考しなければならぬ。羽衣が天女の必須用具であることは、前にも言つたやうに佛教から來た、その思想は餘程美化せられ、淨化せられては居るが、やはり根柢には禽鳥の觀念が横たはつて居る。水浴といふ事もたゞの天女としては必要もなさうだが、白鳥としては意義がある。そこで場所も湖沼や海濱となつて來るのである。美しい白鳥に對し、上代人

が空想を結びつけて天つ少女としたのは、一つは幻影ヒロシからも來て居ると考へられる。尙、人が白鳥に化して去るといふだけの古傳もあつて、日本武尊の御事もさうであるが、今昔物語には、人妻化成弓成鳥飛失語がある。

此の羽衣傳説は世界的に擴布せられて居る。我が領土内の琉球には、銘別子メカベシの話がある。先年岡倉由三郎氏が帝國文學で紹介せられた。朝鮮にも金剛山の靈池に羽衣説話が結びついてゐる。それは高橋亨氏の朝鮮の物語集に委しく紹介せられてゐる。支那には、廣輿記にある浴仙池の話で、我が近江のに類してゐる。

職方乘云。嘗有年少。見美女七人。脱彩衣岸側。浴池中。年少戲藏其一。諸女浴畢。就衣化白鶴去。獨失衣女留隨。至年少家。爲夫婦約。以三年還其衣。亦飛去。故又號浴仙池。

これは鶴と言つてゐる。搜神記や異苑にも類話がある。

其の他諸外國にもいろいろある。千一夜物語のバツソウラのハサンの話を始めとし

て、瑞典の話、トランシルバニヤの日耳曼人間に行はれてゐる話、露西亞民謡のミカイロ、イバノビッチの話、エースターポツテンの芬蘭物語など、或は白鳥といひ、鷺鳥といふ。羽衣の主と結婚するのが普通であるが、ヘッセの物語の山番のは失敗談である。それからエースターポツテンのは幼子成功説話が加味せられてゐる。ハートランドは此の種の説話を一括して、白鳥處女神話 (Myth of the Swan-maiden) と名づけてゐる。

(丙) 變化傳説

文福茶釜

文福茶釜の説話の筋は、巖谷小波氏の日本昔噺所載の文面に據ることゝして説明を進める。此は種々な傳説から變遷したものであるが、順序として先づ甲子夜話 (松浦静山公の隨筆) 卷卅五の茶釜の縁起を見なければならぬ。即ち、

往昔茂林に守鶴といふ老僧あり。應永年中開山禪師にしたがつて館林に來り、茂林寺十世峯月禪師まで隨從す。此僧有德碩學にて又能書なり。茂林寺七世月舟禪師の時、會下の衆僧千人に、え、法體さかんなること

他にたくらぶるなし。然るに茶釜小さくして茶ゆきわたらざるをなげきければ、守鶴いづくとも知らず、一。つ。の。茶。が。ま。な。も。ち。來。り、茶をせんじけるに、晝夜くめどもつくることなし。人々ふしぎにおもひ、其故を問ふ。守鶴曰、これは分福茶釜とて、何千人にてのむとも盡ることなし。殊に此釜ハツの功德あり、中にも福を分ちあたふるゆゑ分福茶釜といふ。一度此釜にてせんじたる茶にて喉を潤す輩は、一生かわきのやまひを煩ふ事なく、第一文武の徳を備へ、物にたいしておそることなく、智慧をまし、諸人愛敬をそへ、開運出世し、壽命長久なるべし。此徳うたがふべからずとなり。それより年月をへ、十世峯月禪師の代にいたり、或時守鶴一睡のうち、手足に毛はえ、尾見えたりなど、誰となくさゝやきければ、守鶴早くさとり、方丈に向つて曰、我開山禪師に随しより、當山にあること百二十餘年になりぬ。然るに化縁つきてしりぞき侍る。我誠は數千載をへたる貉なり。釋尊靈鷲山にて説法なしたまふ。余は八萬の大衆のかすにつらなり、それより唐へわたり、又日本へ來りすむこと凡八百年、開山禪師の徳にかんじ隨從せしより、今に至るまで由來の高恩言語にのべがたし。今はなごりをしまんため、源平八島のたゝかひを今あらはして見せ申さんと、一つの咒文となふるうちより、寺内たちまぢまんゝたる海上となり、源氏は陸、平氏は船、兩陣たがひにせめたゝかふ有様、恰も壽永の陣中にあるがごとし。人々ふしぎと見るうちに、あとかたもなくきえうせぬ。又釋尊靈山上説法のていを拜ませ申さん、しかしかりの戯れごとなりとうと思ひたまふことなかれとて、又も咒文となふれば、庭上梢紫雲たな引、空に花ふり、音楽きこえ、七寶のやうらく、千しゆのしやうごん、ありゝと釋尊獅子の寶座に説法あれば、あまたの御弟子羅漢たち、かうべをうなだれ聽聞のてい、今

見ることのありがたきよと、皆一同にふしながめば、守鶴今はこれまでなりと、正體あらはし、貉となりて飛びさりぬ。方丈はじめ一山の僧俗、みどり子の母にわかる、ごとなげきしたはぬはなし。其のち神に祭り、守鶴宮とて、一山の鎮守となり、今にれいげんあらたなり。扱守鶴能書なりといへども筆跡皆うせて、直堂の札のみのこれり。今打碑して人にあたふ。是をかけおけば悪魔をはらひ、よろづの災難をのぞく、信すべし。又茶釜の茶にてねり丸する、守鶴傳の妙薬あり、その功神のごとし。右にいふごとく、守鶴むじなとなり飛さるといへども、まことは是羅漢の化現なりといふ。實に左もあるべし。百有餘年のうちの善行、子弟をなしへ、俗をみちびく、皆よのつれの人のよくおよぶところにあらず、たふとむべし。敬ふべし。とあつて、なか／＼委しい。此の文は何時頃の作か判明しないが、該寺に傳へてゐる所を寺僧の書留めたものである。

茂林寺は上野國邑樂郡六郷村大字堀工ほりくに在る著名な禪寺である。大日本地名辭書所引名跡志に據るに、此の寺は應永卅三年大林正通和尚が開いた。和尚嘗て榛名山もろのこ山下で一僧に逢つた、名を守鶴と云ふ。其の和尚に隨侍したいといふ望を許して伴なひ還り、守鶴の指圖で此の寺を建てた。後守鶴が狐きつねに化して、臥してゐた所を和尚に見られ、慚愧して寺を去つたと言ふ事である。又現に茂林寺から出してゐる扇子の文面を見ると、

守鶴が正通に伴なはれたのは應永廿三年とし、千人法會のあつたのは、七世月舟和尚の代元龜元年とし、守鶴が飄然韜晦したのは、十世天南和尚の代天正十五年二月廿八日としてゐる。前の縁起と異同もあり、年紀も餘りに明白である。此の古傳の核心は、獸が僧形に化してゐたといふ點である。獸の僧形に化すといふ俗傳は、今尙各地方に存して、關西では多く狸といひ、關東では貉と言つてゐる。どちらも似たやうな獸である。日本書紀推古天皇卅五年春二月、「陸奥國有貉。化人以歌之。」といふ事が古く既に見え、狸の變化譚は古今著聞集にもある。寂蓮法師の歌に、「人すまで鐘も音せぬ古寺にたぬきのみこそ鼓打ちけれ」とあるのは、狸の腹鼓と古寺とを結びつけた所が面白い。殊に貉は本草綱目に其の性睡を好むとある。守鶴が睡眠中に本性を顯したと云ふ點は、此處からも聯想せられる。一體狸が人に化すといふ迷信を、漸次坊主にばけるとはつきり言ふやうになつたのも、亦聯想から來たものであらう。禪坊主の恬淡洒落な風貌を、狸の腹鼓だとか、貉の睡つたやうだとか譬へたのが、終に本當になつて、

どこそこの禪僧は實は何山の貉だなどと云ふ風説が方々に生じるやうになつた結果、守鶴の話なども出来たのであらう。

守鶴が本性を現したといふ古傳から、「文福茶釜に毛がはえた」といふ俚諺が発生した。俚言集覽に次の如く之を説明してゐる。

本朝俗談誌に、上野國館林茂林寺に、狸の化せし守鶴といふ僧、住職七代の間納所せし時、釜を調せしことを記していはく、此釜を庵室の圍爐裏にかけ置き、一度水をさせば、五十日がほど涌出で、水をさす事なし。常にぶんぶくくと涌きける。守鶴生をあらはしければ、此の釜のぬしは毛が生えたりと人々いひあへり。

釜の主は毛が生えたといふのを、主の語がいつしか閑却せられて、釜其の物が狸にばけたといふ風に傳へられ、さてこそ今日行はれるやうな形式の説話が出来たのは右で判明する。又文福、分福共に當字で、釜の湯の沸き立つ音の形容といふのが如何にも自然である。

併し器物が獸に化すといふ思想もある。それは百鬼夜行の事である。我が中古時代以後、大鏡や宇治拾遺物語等に見えてゐる。其の基づく所は支那思想である。それを繪に書いたので見ると、種々な器物が奇異な生物として横行するのである。此の妖怪思想は、付喪神といふ草子に、明白に記されてゐる。

器物怪異の傳説は、支那では六朝から唐代に亙つて頗る多い。而してそれは不祥事とせられてゐた。太平廣記に例話が數々載つてゐる。さういふ器物妖怪談が今の文福茶釜傳説には混淆してゐるのである。

尙此の傳説中に存する二三の要素に就いて附説して置かう。狸貉が坊主にばけて物を書き遣したと云ふのは、山崎美成の三養雜記などに見えてゐる。面白いのは、狸の書いた布袋の川渡りの繪を、印宗といふ人が松浦靜山公に示したといふ話で、甲子夜話卷五十一に出てゐる。

禪坊主に茶の湯の好事家の少くなかつた事は、想像に難くない。茶の湯の歴史を説

く迄もなく、足利時代に其の盛行した状況は、狂言記を繕いても直に分る。

守鶴の茶釜(鑪子)は無増無減な所が、いかにも傳説的でローマンチックである。これは俵藤太の龍宮土産の鍋、グリム童話 *Silberne Kanne* の壺も同様である。鑪子の名産は古來西國では筑前の蘆屋釜、東國では下野の天明釜である。茂林寺に傳へてゐる所は天明釜に相違ないといふ話で、これは地理的關係上さうあるべき次第である。

第四章 童話

(甲) 出世童話

一 桃太郎

桃太郎は本邦童話界で最も著名なものである。巖谷小波氏の袖珍日本昔噺の巻頭に之を載せてゐるのは當に其の所を得てゐる感がある。同書の文面を標準として要領を摘むと左の如くである。

- 一、老人夫婦があつた。娘が洗濯してゐると、川上から大きな桃の實が流れて来た。
- 二、娘は桃を持ち歸つて食べようとする、桃は二つに割れて、男兒が踊り出た。夫婦はそれを桃太郎と名づけて愛育した。
- 三、桃太郎は十五歳の時、鬼が島征伐に出陣する。老人夫婦は黍團子を搗いて與へた。途中で犬と猿とが家來になる。犬は旗持、猿は太刀持である。雉も味方になつた。
- 四、順風一路、鬼が島に着く。雉を遣つて鬼に降伏を勧めたが聽かない、犬も猿も跳り込んで奮戦した。
- 五、敗殘の大鬼は寶物を出して降参した。桃太郎は大鬼を縛つて猿に牽かせ、犬と雉には寶物がかつがせてめでたく凱旋した。

右の説話の筋は時代によつて幾分の異同がある。瀧澤馬琴の燕石襟志には、老婆が桃二個を得て歸り、夫婦共々食ふと、忽ち若やぎ、身持となつて男兒を生んだと書いてあり、中井履軒の昔々春秋にもさう見えてゐる。これは現今の童話のやうに、桃が自然に割れて、桃太郎が生れるとした方が無邪氣である。燕石襟志には鬼の寶として、隠れ蓑、隠れ笠、打出の小槌の三つしか言つてゐないが、今はその外に、如意寶珠、珊瑚、玳瑁、眞珠の類をも加へて言つてゐる。堀野文祿氏所藏の享保二十年の繪

卷には、「大王涙を流して、命を助け給はらば、我等ひとりの娘あり、其名を十郎姫となづく、かたち世にすぐれたり。三つの寶を相添へ、姫を奉らんと申しければ、太郎よろこび、大王が繩をときゆるし、三つの寶と姫をとまなひ、本國へかへりけり。」といふやうな文句があるとの事だが、少からず文學的技巧が加はつてゐる。

桃太郎誕生の一齣は頗る童話的趣致に富んでゐる。蓋し神話の影響であらう。川と桃との二要素に就いて考へるに、川から流れて來た物が化して人となるといふ古傳は、賀茂別雷命の神話にある丹塗矢の故事（釋日本紀所引山城國風土記）がその一つである。火雷神が假に丹塗矢に化し、川を流れ下つて玉依日賣にあふ、媛は之を床邊に置いて感じて孕んだといふ説話で、所謂神婚神話である。矢は電光の譬喩であらう。吉野川の柘媛の故事や、嬉遊笑覽にある瓜姫の話は、やはり川から流れ下るといふ要素が含まれてゐる。

川を流れて來た竹の中に男子を得たといふ古話は支那に存する。後漢書西南夷傳に、

夜郎者。初有女子。浣於澗水。有三節大竹。流入足間。聞其中有號聲。剖竹視之。得一男兒。歸而養之。及長有才武。自立爲夜郎侯。以竹爲姓。

とある。此の竹王の事は、華陽國志や述異説にもある。之に女子の洗濯の事が含まれてゐるのは注意すべき點である。竹中の人といふのは、我が竹取物語の赫哉姫もそれで、これは寶樓閣經に基づいてゐる、即ち印度思想である。さういふ様な思想が桃太郎を生んだのである。

桃は我井白石の東雅に、百千の百の義であらうと云つてゐる。谷重遠は緋實の義として、色の方から解釋してゐる。桃を仙木とするのは全く支那思想である。三千年に一度實るといふ漢武帝内傳にある西王母仙桃の傳説は、夙に我が國にも傳つてゐる。例へば落窪物語に、「みちとせになるてふ桃の花盛折りてかざさむ君が類に」といふ歌がある。而して邪鬼を祓ふ仙木とする思想は、十洲記の大桃樹説に顯著である。即ち、「東海有山名度索。有大桃樹。屈蟠數千里。曰蟠桃。」といひ、此の山の桃の事を

尙、風俗通にも、「上古之時有神茶鬱壘昆弟於度朔山上桃樹下。簡閱百鬼。無道理者。縛以葦索。執以食虎。故今臘除夕節。桃人垂葦索。畫虎於門。以禦凶。」とある。此即ち追儼の由來である。古事記の諸冊神話中に、既に鬼やらひの一段がある。それは女神神去りまして後、吾を視給ふなどあるのに、男神が強ひてお窺ひになると、女神の御禮に雷神が居た。女神はお恥ちになつて、黄泉醜女よみづにめをして追はせられた。男神は桃の果を投げて、その難をおのがれになつた。さうして桃に「おほかむづみの命」といふ名を賜つた。此の一段は古史神話にいつしか支那思想が援入したものと認めてよからう。桃太郎の鬼が島征伐、その桃と鬼との因縁はさつと右のやうな次第である。日本一の黍團子といふ事も童話的である。日本一といふ語は、大鏡や神皇正統記にある。謠曲にはいよゝゝ多い。黍團子は支那の風を傳へたものらしい。

犬、猿、雉が桃太郎の卒伍となるのも亦童話的である。動物が禽獸説話でなく、人間の相手として語られるのは童話には有り勝ちの事で、グリム童話集の例にしても、

アッセンブツテルに於ける鳩だの、ロートケーブヘンに於ける狼だの習さうである。

未開時代の人の考としては當然の事であるし、今日兒童の心理を考へて見ても尤な事である。それから鬼が島を鬼門とし、申酉戌を以て之に對せしめたのだといふ方位説の如きは、餘に穿鑿に過ぎてゐはしないか、予は之に賛しない。

犬と軍陣との關係は、太平記卷廿二の畑六郎左衛門の犬獅子の例もある。忠義者の犬の話はなかく多いが、それは後節花咲爺に述べてある。猿が奮闘する事は、今昔物語の猿神でも分るが、或は嚮導者としての媛田わらだ昆古神こんこじんから思ひついた考かも知れない。雉きどり（きどす、きどし、きじ等といふ。新井白石の東雅に、其の性の勇み烈しきよりして、其の名があるやうに云つてゐるが、啼聲を擬した語であらう。）は古史神話に、高天原から葦原の中つ國に使者となつた無名雉ななしきが見えてゐる。雉の善く闘ふ事は支那の物にも見えてゐる。

鬼の寶としての隠れ笈、隠れ笠、打出の小槌の思想は、室町時代には最も能く民間

に擴つてゐる。能狂言の寶の笠、寶の槌、節分、惠比須大黒などを見れば、それが能く分る。拾遺集卷十八の「隠れ蓑かくれ笠をもえてしがなきたりと人に知られざるべく」の歌を見ると、平安朝時代にも能く知られてゐたのである。隠れ蓑、隠れ笠は隠形ひんぎやうの秘術を意味するもので、印度思想である。眞言に此の事がある。今昔物語の龍樹菩薩の話を見ても分る。宇津保物語俊蔭の卷に、一萬恒河沙の財寶を打出す大福德の木の事が見えてゐるが、打出の小槌の思想である。又小槌が大黒天の持物となつてゐるのは誰も知る所である。此の無限の財寶を打出す物の話は酉陽雜俎の新羅國の兄弟の貧富に關する話にも、黄金の槌がある。洞神傳（太平廣記所載）の大盤小盤は、食物錢帛を打出すものである。さういふ如意寶の思想は外國にもある。即ち、グリム童話第百三番のジュッセ、ブライの壺は、欲するまゝに鹿の肉粥が涌き出る。千一夜物語の亞刺比亞の話にも類例が多い。佛教の七寶には種々異説があるが、いろ／＼な寶を一つに集めると、彼の寶船の寶盡しのやうな考が取纏つて來るのである。

抑、桃太郎の鬼が島征伐は、鎮西八郎爲朝の鬼が島渡りをふまへて構へた趣向であるといふ事は、既に瀧澤馬琴の燕石志にある考である。此は實に動かすべからざる説である。保元物語の卷末に、爲朝が伊豆の大島に流された後の事として記してあるのは左の通りである。

さる程に永萬元年三月に磯に出で、遊びけるに、白さき青さき二つつれて、おきの方へ飛び行くを見て、わしだに一羽に千里を飛ぶといふことを聞かず。いはむやさきは一二里にはよも過ぎじ。此の鳥の飛ぶやうは定めて鳥ぞあらむ、おうて見むといふまゝに、はや舟に乗りてはせて行くに、日も暮れ夜にもなりければ、月をかゞりに漕ぎ行けば、あけぼのにすでに島かけ見えければ、漕ぎ寄せたれども、あらいそにて波高く、いはほさかしくて、舟を寄すべきやうもなし。おしめぐらして見給ふに、いぬの方より小河ぞ流れ出でたりける。御ざうし（爲朝のこと）は西國にて舟にはよくてうれんせられたり。舟をも損せずおし上りて見給へば、たけ一丈あまりある大童の、髪はそらさまに取りあげたるが、身には毛ひしと生ひて、色黒く牛の如くなるが、刀を右にさして多く出でたり。おそろしなどいふばかりなし。申すことば聞き知らざれば、大かたすゐしてあひしらふ。日本の人こゝに島ありとは知らねば、わざとよもわたらじ。風にはなたるらむ、昔よりあくふうにあうて、此の島に來るもの生きてかへることなし。あらいそなれば、自ら來る舟は波にくだか

る。此の島には舟もなければ、のりてかへることなし。食物なければ、たちまちに盡きぬ。もし舟あらば、かて盡きぬさきに早く本國に歸るべしとぞ申しける。耶等どもは皆けうをさまして思ひけれども、爲朝は少しも厭がず、磯に舟を置きたればこそ波にもくだかるれ、高く引き上げよとて、はるかの上にぞ引き上げける。さて島をめぐりて見給ふに、田はたもなし、菓子もなく、きぬわたもなし。なんぢら何を以て食事とするか問へば、魚鳥と答ふ。あみ引くとい見えず、つりする舟もなし。又はりもたてず、もちなほも引かず。いかにして魚鳥をとるぞと問へば、我等が果報にや、魚はじれんとうち寄せらるゝをひるひ取り、鳥をばあなを煽りて、領地別ちて其の穴に入り、身をかくしこゑをまねびて呼べば、其の聲につきて鳥おほく飛び入るを、あなの口をふさぎてやみとりにするなりといふ。げにも見れば鳥あな多し。其の鳥のせいはいえ鳥ほどなり。爲朝これ見給ひて、くだんの大かぶらにて木にある鳥を射おとし、空をかけるを射ころしなどし給へば、鳥のものども舌をふるうておぢ恐る。なんぢらも我にしたがはずば、かくのごとく射殺すべしとのたまへば、皆ひれふして従ひけり。身に着るものは網の如くなるぬのなり。此の布をめんくの家より多く持ち出で、前に積み置きけり。鳥の名を問ひ給へば、鬼が鳥と申す。然れば汝等は鬼の子孫か、ん候、さては聞ゆる寶あらば取り出せよ見むとのたまへば、昔まさしき鬼神なりし時は、か。く。れ。み。か。く。れ。が。さ。う。か。び。く。つ。けんなどいふ寶ありけり。其のころは舟なけれども、他國へも渡りて、日ニ食うひとのいけにへをも取りけり。今はくわほう盡きて寶もうせ、かたちも人になりて他國へも行く事かなはずといふ。さらば鳥の名を改めむとて、ふさき葦多く生ひたれば、葦鳥とぞ名づけける。此鳥ぐして七島知行す。これを八丈

が鳥のわき鳥と定めて、年貢を運送すべきよしを申すに、舟なくしていかゞすべきとなげく間、毎年一度舟を遣はすべきよし約束してけり。たゞし今渡りたるしるしにとて、くだんの大わらは一人ぐして歸り給ふ。

といふ次第で、保元物語には爲朝の勇者たるを激賞してある。此ういふ國民的英雄が一般民衆の腦裏に深く印象せられてゐて、國民童話を産み出したのは争はれない。御伽草子の御曹司鳥渡りに寫されてゐる源九郎義経も、和田合戦の後、朝鮮に渡つたといふ朝比奈三郎義秀も、爲朝と同様の勇者で、此等の性格が桃太郎に影響してゐるといふのは、實に見易い事である。必ずしも倭寇の影響が桃太郎を生んだと言はなくてもよい。

桃太郎童話を比較説話學上から觀察すると、他界からの掠奪といふ筋に歸する。フエヤリーランドから寶を持つて來るといふ話は其の分布がかなり廣汎である。それには此の桃太郎や一寸法師のやうに成功するものもあり、又不成功に終る筋のものもある。北部獨逸には一童子が父と共に魔界から銀の大盃を持ち歸り、後それを大金で人に賣渡

した話がある。打出の小槌でなく、酒杯であるのが多い。我が桃太郎はいかにも積極的で、年少氣鋭、遠征を企て、分捕功名を遂げてゐるのは、一に尙武思想の表現せられたもので、頗る日本的である。

二 一寸法師

現行の一寸法師の話は全く御伽草子の本文に據つたのである。紙幅が無いから引用しない。そのつもりで説明を進めて行く。

難波の里の翁媪が、住吉の神に子を祈つて靈驗があり、一子を擧げたといふのが冒頭である。これは世相を反映したもので、神佛の申し子といふ事は文學上に幾らも例がある。此の生れた子が身長僅に一寸であるので、一寸法師と名づける。此の何々法師といふことは、今日の何坊などと同様の意味で、室町時代あたりの風習を示してゐる。翁媪は此の不具の子をあさましいと思つて捨てようとする。處が法師は自ら請うて家を去つて上洛する。上洛後大に運が開けて出世するのである。

短小人の思想は支那の典籍に所見が多い。概して中國以外にさういふ人の棲んでゐる國があると考へられてゐた。

僬僥氏人長三尺短之至也。(史記)

西海外有_二鵠國_一。男女皆七寸。壽三百歲。人行如_レ飛。日千里。惟畏_二海鶴_一。鶴過吞_レ之。亦壽三百歲。人在_二鶴腹中_一不_レ死。而鶴一舉千里。(神異經)

畢勒國人長三寸有_レ翼。善言語戲笑。因名_二語國_一。(續博物志)

女王國東復有_レ國。皆倭種。又有_二侏儒國_一在_二其南_一。人長三四尺。(魏志)

此ういふ考は誇張せられると、無稽の説に了るが、長大人の思想と共に相對的關係をなしてゐる。侏儒といふ語は禮記や左氏傳にある。漢書の東方朔傳に、朔が騶侏儒を給いた諧謔を載せてゐる。

我が古典にも例がある。それは日本書紀天智天皇十二年三月の事で、常陸國貢_二中臣部若子_一長尺六寸とある。十六歳の男子である。さうして朝廷に仕へてゐる。續日本紀

文武天皇二年には、侏儒備前國人秦大兄賜_ニ姓香登臣_一といふ事もある。中古雜藝に侏儒を使つたのは、今の見世物、興行物の類である。

予は此の一寸法師童話には、我が古史神話の影響があると信じる。それは蛭兒神話との關係を考へなければならぬ。諾冊二神の間にお生れになつた蛭兒を三歳まで脚が立たないので、舟（古事記では葦船、日本書紀では天盤櫂樟船）に載せて放ち棄てるとある。（此の事に就いて、馬琴は其の著玄同放言に、蛭兒は星の神で北辰だとしてゐる。）此の蛭兒は後世西の宮に祀られてある。地理的關係から考へても、一寸法師に蛭兒神話の餘波の存するのは疑ふべくもない。尙他の一つは少彦名命の神話である。神代紀一書に、

其後少彦名命行至_ニ熊野之御崎_一。遂適_ニ於當世郷_一矣。亦曰。至_ニ淡島_一而縁_ニ粟莖_一者。則彈渡而至_ニ常世郷_一矣。

とあり、又、

初大己貴神平_レ國也。行_ニ到出雲國五十狹狹之小汀_一而且當飲食。是時海上忽有_ニ人聲_一。乃驚而求之。都無_レ所_レ見。頃時有一箇小男。以_ニ白藪皮_一爲_レ舟。以_ニ鶴鷄翅_一爲_レ衣。隨潮水以浮到。大己貴神即取_ニ置掌中_一而翫之。則跳嚙_ニ其頰_一。乃怪_ニ其物色_一。遣_レ使曰_ニ於天神_一。于_レ時高皇產靈尊聞之而曰。吾所產兒凡有_ニ一千五百座_一。其中一兒最惡。不_レ順_ニ教養_一。自_ニ指間_一漏墮者必彼矣。宜愛而養之。此即少彦名命是也。

とある。此等の文面は、此の御神の矮小な體格と輕快な性格とを語るものである。人聲があり乍ら影を認めないとか、掌中に置くとか、指間から墮ちるとか、頰を嚙むとか云つて、惡戯好きの矮人たることが明瞭に見えてゐる。一寸法師の脚色が此の神話に類似することは、誰も首肯せられよう。

蓋し一寸法師の如き思想は東洋だけではない。グリム童話白雪姫には、金掘の七侏儒が現れる。同じ童話のデヤ、シンゲンデ、クノーヘンには、猪を討取らうとする弟を助ける侏儒もある。獨逸神話學上 Zwerge と云ひ、Erdgeist（地精）と云ふ者は、何

れも黒い妖神で、其の大きさが或は四歳大の兒童であるとか、手指位の高さだとか云はれ、足の様子が分らぬからといつて、灰などを撒いて、足跡を辿らうものなら、立所に祟を受けると信せられてゐる。そこで我が一寸法師に對比すべき童話はといふと、グリム童話集第四十五番 Daumerlings Wanderschaft (一寸法師の旅と譯したらよからう。)である。其の要點を摘むと、

- 一、旅に出る。
- 二、仕立屋に従事し、やがてそこを去る。
- 三、盜賊の群に入り、その手先となつて、王の寶藏に忍び込み、財貨を持出す。後、一金貨を得て去る。
- 四、宿屋の下男となり、他の奸計に陥つて、遂に牛の腹中に入り、辛うじて通れる。
- 五、狐に吞まれたが免され、やうやくにして家に歸り、前に得た金貨を贖す。

と云ふ筋である。此の小人は元來仕立屋の子だから、初め仕立屋に仕へた。我が一寸法師は都の宰相殿にかくまはれる。此は彼我民俗の相違で、又御伽草子は中古物語の餘波だから自然さういふ趣向に出てゐる。足駄の下で、人よ蹈むなといふ類の事など

は彼にも存する。我が一寸法師には戀愛談が錯綜せられてゐるが、グリムの中には無い。鬼が島に吹上げられて、鬼に吞まれて其の眼から出て來るといふ趣は、グリムの方にもある。一寸法師が打出の小槌を得て以後は、積極的地位に立ち、先づ身長を打出して人並の體となる。此がいかに興味のある點で、それから食物乃至金銀思ひの儘に打出し、めでたく歸洛して、殿上人に列なり、未樂しく榮える。此の點には最も能く國民思想が反映せられてゐる。人生の現世的理想としては全くそれである。又神佛の冥護を加味したのも時代的である。鬼が島渡り以後の筋は、桃太郎童話と近接してゐる。一寸法師の運命の展開は、打出の小槌の掠奪に原因する。一寸法師童話も實は桃太郎と同様、フェヤリーランドからの掠奪といふ事を筋としてゐるが、グリムなどのやうに盜賊説話とならずに、頗る美化せられたのが面白い。要するに神話學的見地からすると、一寸法師の後半齣は、大國主神が根の國から歸られ、彥火火出見尊が海宮から還られて後の運命と同様で、英雄神の最後の成功を思はせるもので、太陽神話

の餘波が確に此の童話にも傳つてゐるのである。尙此の童話は御伽草子に於ては、當時の口碑を資材としたのであらうが、百合若大臣のやうに外國種の傳説の影響があらはしないだらうか。又桃太郎との先後如何といふことになる、なか／＼解決が困難になつて來るのである。

(乙) 禽獸童話

一 白 兔

因幡の白兔の話は、巖谷小波氏の日本昔噺にも出てゐるが、今日は寧ろ國定小學讀本の方から多くの人の頭にはいつてゐるであらう。出典は古事記で、大國主神（大穴牟遲神）の神話に包含せられた一つの挿話である。原文を假名交りに直して引かう。

故、此の大國主神の兄弟八十神ましき。然れども皆國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其の八十神各、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に帯を貢せ、從者として率て往きき。こゝに氣多の前に到りける時に、裸なる兔伏せり。八十神其の兔に謂ひけらく、汝爲むは、此の海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよといふ。故其の兔八十神の教ふるま

ゝにして伏しき。爾に其の鹽の乾くまに、其の身の皮悉に風に吹き拆かえしからに、痛み泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、其の兔を見て、なぞも汝泣き伏せると問ひたまふに、兔まをさく、僕汝島に在りて、此の地にわたらまくほりつれども、わたらむよし無かりし故に、海の和通を欺きて言ひけらく、吾と汝と、族の多き少きをくらべてむ、故汝は、其の族のありのこゝろ率て來て、此の島より氣多前まで皆列み伏しわたれ、吾其の上を踏めて、走りつゝ讀み渡らむ、こゝに吾が族と孰れ多きといふことを知らむ、此く言ひしかば、欺かえて、列み伏せりし時に、吾其の上を踏みて讀み渡り來て、今地に下りむとする時に、吾、汝は我に欺かえつと言ひ竟れば、即ち最端に伏せる和通我を捕へて、悉く我が衣服を剥ぎき。これに因りて泣き患ひしかば、先だちいでませる八十神の命もちて、うしほを浴みて、風に當り伏せれと誨へたまひき。故教のごとせしかば、我が身悉に傷なはえつとまなす。こゝに大穴牟遲神、其の兔に教へたまはく、今とく此の水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黃を取りて、敷き散らして其の上に輾轉びてば、汝が身本の膚のごと必ずいえなむものぞと教へたまひき。故教のごとせしかば、其の身本の如くになりき。これ稻羽の素兔といふもの也。今に兔神ともいふ。故其の兔大穴牟遲神に白さく、此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ、帯を貢ひたまへれども、汝が命ぞえたまひなむと申しき。

此の古傳を補ふに足る資料が一つある。それは塵袋（塵添瀟囊抄にも）に出てゐる左の文で、故栗田寛氏の古風土記逸文に載せてある物である。

因幡記ナミレハ、カノ國ニ高草郡アリ。其名ニ釋アリ。一ニハ野ノ中ニ草タカケレバ、タカサト云、其名ナ郡ノ名トセリ。一竹草郡ナリ。コノ所モト竹ノ林アリケリ。其故カク云ヘリ。竹ノ草ノ長ト云心ニテ、竹草トハ云ニヤ。其竹ノ事チアカスニ、昔コノ中ニ老タル兔スミケリ。或時俄ニ洪水出來テ、其ノ竹ノ林水ニ成ヌ。浪洗テ竹ノ根チ堀ケレバ、皆崩レ損シケルニ、兔ノ根ニノリテ流レケルホドニ、オキノ島ニツキヌ。水カサ落テ後、本所ニ歸ラムト思ヘトモ、渡ルベキカナシ。其トキ水中ニ鰐ト云魚アリケリ。此兔鰐ニ云ヤウハ云々（下略）

此の兔鰐が大國主神の神話中に挿入せられたのは、文明神としての御神の功業を具體的に傳へるためで、日本書紀に、「大己貴命與少彥名命。戮力一心經營天下。復爲顯見蒼生及蕃產。則定其療病之方。」とあり、古語拾遺にも禁厭の法を定められたと書いてある如く、御神が一面醫藥神として崇敬せられる所から起つたのである。

以下説話の解説に入らうと思ふ。抑此の兔の素性は、古事記では、淤岐島に在つて因幡に渡らうとしたのであるが、因幡記の方は、元來因幡の高草郡に栖んでゐた老兔で、洪水のために島に漂着し、退水後本土に還らうとしたとある。これで渡海のいは

れが能く分る。尙我が國では少い洪水説話が此の因幡記の古傳にあることも面白い。

淤岐島は隱岐國ではなからう。話の筋から考へてもそれでは距離が過ぎる。因幡の内の小島であらう。氣多前は元の氣多郡（元の氣多郡と高草郡とが今の氣高郡である。）の海岸にある岬角である。

それから最も注意すべきは和邇である。これを言葉通りに鰐（クロコダイル）と解すると、それが海にゐる事は全く理窟に外れる。國定讀本では鰐鮫わにざうとしてある。我が國の話としては、さう解するより方はない。一體古史に「わに」の所見は少くない。彼の海宮神話にも鵜羽神話にも見える。出雲風土記には語ノ臣猪麻呂の女が和爾に取られた話も出てゐる。アストンは之を Sea-monster or dragon と解してゐる。

蒲の穂を用ゐて、兔の皮膚を治療するといふ考は、一種の民間療法で、上代の醫學思想を認むべきものである。

此の童話で兔が「わに」をたばからうとし、「わに」は一旦欺かれたが、兔の放言が

自業自得で「わに」の怒を買ひ、殆ど身の破滅に至らうとしたといふのが、禽獸童話として一貫した筋である。此に至つて、何人も尙一個の動物説話を思ひ浮べざるを得ない。即ち猿と海月くらげと題する噺で、小波氏の日本昔噺にもある。海月が龍宮の使者となつて、猿の生肝を取るために猿を誘拐し、自分の言ひ損じから失敗する話である。此の説話の根源は、今昔物語卷五に、龜爲猿被謀語で、全く印度種の話である。即ち本行經に見えてゐる。(本行經の所傳も、他に種々の異説がある。)其の一旦欺れようとして、欺かれずに済んだ猿は、智力の勝利者である。海月の方は(今昔物語では龜)失敗者である。兎鰐噺の「わに」と兎との關係が、形式上それに類似してゐるのは、争はれない事實である。さういふやうな點から考へると、白兎説話は印度種の猿海月噺のやうなのが、早くも日本化して古史中に摺入したので、本來の物は印度の話として今昔物語に採られたのであらう。(此の事に就いては曾て故堀謙徳氏が東亞の光に委しく考證せられた。)もとより兩方の説話の要素には大分逕庭がある。白兎の方には生

肝の事などは少しもない。とにかく白兎噺は動物説話として、メーメルヘンの性質を帯びたもので、次に説くかちく山の童話を生んだ親であると思ふ。

二 かちく山

かちく山の童話は、今日行はれてゐるのは、巖谷小波氏の日本昔噺が標準になつてゐるとしてよい。江戸時代では標題を兎の手柄と言つてゐる。瀧澤馬琴の燕石襟志に書いてある筋を参考しよう。今のと大なる相違はない。即ち、

書田夫のとし老たるが山田耕すありけり。妻の姫ひめを送り來たるに、狸ねここれを竊くらひつ。翁腹立て、やがてその狸を生いけと拘り、家に牽ひもて歸りて、梁はりにつりあげたり。さて妻の姫にいふやう、この狸を羹かたにして食ふべし、よくとゝのへて、わが歸るを待給へといひて、亦草野くさのに出づ。姫を春つて歌をうたへば、狸哀あはて、おのが命だに助給はゞ代りて麥を春つんさいふ。いと不便なれば索たはをときておろすほどに、狸忽たちに廻くを嗽くころして、その尖いばらを羹とし、やがて化まじて廻くになりてをり。翁草野より歸りて、彼羹を啜すすらんとするに、狸本の形をあらはし、廻食まがの翁よ、廻くの下の骨を見ずやとあざみ笑ひつ、外のかたへ走り出でて失うにければ、翁は骨を擲なち、廻くが骨を見て、泣くことかぎりなし。又こゝらの山にとし廻くありけり。翁がいたく號哭ごう聲こゑを聞きて、訪たづひなくさめ、吾儕わが廻くの仇あだを報むいてん、まづ豆まを熱給へとて熱しつ。これを筒つにもりて山へとて

もてゆくに、狸その香により来て、われにも豆一握ばかり得させよといふ。兎ははかりたる事なり。向なる山まで柴を貰ていかばといへば、ともかくも宜ふ事はそむかじ、まづその豆を得さし給ひねと、せちに乞にけれど、柴を貰して後にこそとて、あまたなる柴を貰し、これを先へたて、ひそやかに燧をとり出て火をうちつくるに、狸その音を怪て、あれは何ぞと問へば、かちく山なりと答ふ。その火は柴へ燃つきたりければ、狸又問、兎こゝなんぼうく山也と答する程に、火ははや燃ひろがりて、狸の背を焼にければ、いたく叫びてふし嘔び、辛じてふり落しつゝ迷うせにき。兎又味噌に蕃椒をすりませたるを膏薬にこしらへ、笠をふかくし、火傷の薬なりとて賣けり。狸は背を焼爛されて、せんすべなき折なれば、よき薬ならんと思ひて、背の火傷へつけます。いとど爛たる疵へ蕃椒を塗附られ、ほてりて痛きこといふべくもあらず。そこから嘔び狂ひて泣事かぎりなし。さて廿日あまりを経て、狸の火傷癒たり。兎又船を造る。狸これを見て、その船何にかすと問に、漁せんと思ふ也とて、欺は、狸うらやましく思へども、このみちの匠のわざには疎かり、われは土もて造らんとて、土船を造りて、兎もろともに澳のかたへ漕いだすに、狸の船沈みて忽水に溺るゝを、兎は楫をとりのべて、これをうち殺し、翁がために廻の誓を復いしといふ。

と云ふのである。(現行童話では、兎が己の舟を木造とし、狸のを泥舟として支度するやうに言ふ。)

此の童話に狸汁の事がある。嬉遊笑覽所引親元日記に、寛正六年十二月朔日御被官廣戸入道狸進上とある。當時料理に供したのである。松永貞徳の「腹までもまだ入りたらずうまし」と舌鼓打つ狸汁かな」といふのも面白い。能狂言の隠し狸(狂言記外五十番卷四)に、「振舞に狸一色で御出なさるゝ約束ぢや」といふ文句もある。室町時代以降狸を食膳に上せた風俗のあつたのが能く分る。狸汁の事はかりでなく、此の童話は野趣に富んである。民衆的である。それから狸が老嫗を殺して肉汁を調へ、自ら嫗に化けて翁を誑かし、翁は知らずして其の肉汁を啜るといふのは、狸の狡猾な點を誇張したもので、之が兎の復讐の伏線となるのである。但人肉の羹といふのは酸鼻の極で、馬琴も、唐山にはさる例は多いが、君子國の風俗は慈善で、人肉を屠つて人に侑めた事はないと論じてゐる。大江山や安達原などにはあるが、それは兎の所爲として表されてゐる。我が民族に食人族めいた所はないのである。

扱前節の白兎は、鰐を欺いて難を招き、皮膚を剥がれて苦しんだのである。此の童話では狸が其の地位に變つて、兎は却つて善性のものとなり、老翁に同情して敵討を

してゐる。脚色上全く脱化したものである。唐辛味噌も八十神が兎になさつた悪戯に基づいてゐるやうである。かちく山、ぼうく山などといふのも如何にもメールヘンらしい。埴土を以て舟を造るといふ事が神代紀にあるから、土舟の事も強ち架空的でもない。此の童話は前半が山中でのこと、後半が水上での事で、場面の變化のあるのも興味がある。

禽獸童話は多くは智力の勝利者を謳歌するのが本領である。これでは兎が智者で、狸が愚者である。狸は初め狡猾で、一度は老翁を欺いたが、兎の計略に敵すべくもなく失敗して、遂に其の身の破滅を招來した。此の狸は童話の形式上、猿と海月の海月と同様である。要するに復讐を目的とした動物闘争譚としてのかちく山は、即ち猿蟹合戦とも相似たものである。敵討の事は次節に述べる。

三 猿蟹合戦

猿蟹合戦の童話も小學校の最低學年で口授することになつてゐるが、標準はやはり

巖谷小波氏の日本昔噺でよい。これも多少の異同はあるが、瀧澤馬琴の燕石棟志のが参考になる。それは次の如くである。

猿と蟹と山ノ麓を繞りあうて、猿は柿の核を拾ひ、蟹は火飯を拾ひつ、猿はこれを見て、利を急にせまくほりし、柿の核に易よといふに、蟹はこれをいなまず、己が飯と易て、彼ノ柿の核を殖にければ、立地に芽を出し、その樹俄頃に向上るばかりになりて、柿ノ果夥なれり。されど蟹は樹に縁に便なければ、彼ノ猿して果をとらするに、猿は杓にて柿をうち食ひつ、溢きを蟹に投與へ、甘きはみなおのが腰に着る程に、蟹は樹下において、いたく甲を撃傷られ、辛じて穴へ逃入るに、その疼痛堪がたくて遂に得起す。蟹が親族妻子縁由を聞て、且驚き且怒り、やがて軍兵を起して猿を責む。猿も又夥の眷族を將てこれと挑めり。其の威勢當べうもあらざれば、蟹はますく憤に堪ず、おのく穴に蟄りて、軍略を相議る折から、白、杓、蜂、鶏卵等詣來て、共に奇計を運らし、まづ蟹に和睦を乞して、ひとり猿王を穴居へ誘引、これを爐邊にやらしたり。猿はその謀略あるを知らず、火箸を取て埋火を掻起さんとするに、鶏卵は爐中へ伏して、發てその腕を焼にければ、おどろき避て、厨なる糠鉢桶といふものに手をさし入れ、火傷のほてりを醒さんとするに、蜂は桶のほとりにをり、亦泣つらいたく刺せば、拂もあへすますく叫びて、背門より走出口とするを、滑海藻足にまつはりてこれをすべらし、杓は棚よりおちくだり、白は金門の上より轉落て、ふたゝび脊をうち碎くに、よわり果て、得も起す、そのとき蟹ども群たち來て、蟹をあげ、猿を夾、その尖

を啖^{くちひ}て歡びあへりといふ。

猿(さる)の語源は、新井白石の東雅に據ると、その「さ」に躁^{さわ}の意があり、「る」は語助で、驚、鵠、兔の「さ」皆同じと言ひ、蟹(かに)の「か」は殻のある義としてゐるが、確には分らない。

扱此の童話の冒頭に、柿の種子と握食とを交換することが見える。物々交換によつて各利益を得ようといふ風習は、古史神話以來例のある事で、天照大神と素戔嗚尊とが劔と曲玉とを交易せられることもあるし、第二章で言つたやうに海宮神話の幸換^{さちかへ}のこともある。握飯は戰國時代軍陣の間には既に行はれてゐたらしい證がある。柿は日本の果樹で、能狂言の柿山伏に、山伏が柿の木に登つて果を食ると、柿主が猿よ〜となぶることが見えてゐるから、猿が柿の實を好むことも謂れがある。

猿が貪婪で、残忍性を帯びてゐるのは、此の説話に遺憾無く發露せられてゐる。正直な蟹がその毒手に罹つて斃れ、そこで其の子の義憤から、敵討となる。此の童話は

一つの復讐譚である。現行の童話は標題に猿蟹合戦といふが、あまり合戦の次第を語らない。馬琴の書いてゐるやうに、元は猿蟹兩軍相戦つたやうに語られたのである。蟹が他物と闘つたと云ふ説話は、日本靈異記中卷に、贖^く蟹蝦命^{かにえびのみこと}放生得^{はなはだ}現報^{げんぱう}縁^{ゆかり}といふのや、贖^く蟹蝦命^{かにえびのみこと}放生現報所^{はなはだげんぱうしよ}助縁^{すけゆかり}といふのがある。随つて今昔物語卷十六の山城國女人依^よ觀音助^{くわんおんすけ}遁^{にげ}蛇難^{へびがたふし}語^{ことば}、即ち蟹滿寺縁起が生れて來た。此うなると、觀音信仰の靈驗談である。一體禽獸合戦といふ事は室町時代では一つの文學的 주제로、御伽草子にはいろいろ其の例がある。十二類合戦繪詞には、狸が十二支の獸類と戦つて敗れる事が見え、鴉鷲合戦物語には、鴉軍が敗北する。實に戰國亂離の時代の反映に外ならない。

蟹にかたらはれた者に、石臼や栗や蜂がある。或は杵を加へたり、鶏卵を入れたりする。とにかく此は後節の舌切雀で説くやうに、宇治拾遺物語の雀の報恩談にも存する趣向である。

此の童話の根源に就いて、山東京傳の骨董集に、義楚六帖所引根本雜事の一説話を引證して居るが、相互の系統は密接であるとは思はれぬ。此はやはり前々節にも云つた猿と海月話の如く、或一つの印度起源の説話が漸次日本化したものであらう。獨逸のグリム童話集にある所のルンペンゲジンデルといふ話、ヘル、コルベスといふ話などは、殆ど猿蟹同様の脚色であるのは、印度起原のものが西漸したとしか思へない。又猿が童話の主人公となるのは例が多いことで、デー・ンハルトの博物學的民間童話を見ると、亞弗利加の獨領ギニアには、猿が悪戯をする話があり、比律賓では、猿が光蟲に負ける話もある。

我が國の復讐譚の最も古い例は、日本書紀にある。此の事は故平出鏗二郎氏の「かたきうち」といふ著書を参照せられたい。平安朝に降つては、今昔物語卷廿五に此ういふ話がある。平維茂が郎等を召しつれて、父の兼忠が上總守となつて下つたのをたづねたをり、兼忠は小男侍に腰を叩かせて居たが、維茂の郎等の太刀介といふ五十歳

の髯武者を見て、彼こそ汝が父の仇だと教へた。小男侍はかねて心にかけてゐた仇であるから、健氣にも討取つたといふ話で、此く討取つたのは天道の許しであると記してある。室町時代の文學には、小説の幻夢物語や謠曲の放下僧、望月の如く敵討物がある。敵討は忠孝の大義の發現と考へられてゐた昔の事であるから、かちく山や猿蟹合戦も其の思想を帯びて出来たのである。

(丙) 物眞似童話

一 癩 取

此の童話の資料は、宇治拾遺物語卷一の「鬼に癩取らるゝ事」の條である。これは怖らくは該物語の作者が、當時の民間説話に取材したものであらうと思ふ。即ち、

これも今は昔、右のかほに大なる癩ある翁ありけり。大かう（かう一本よそ）山へ行きぬ。雨風はしたなくて歸るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ。又樵夫もなかりけり。おそろしきすべきかたなし。木のうつぼのありけるにはひいりて、目も合はず屈まり居たる程に、遙より人の聲多くして、とゞめきくるおとす。いかにも山の中に唯ひとり居たるに、人のけはひのしければ、少しいき出づる心ちして見出しければ、

大方やうくさまくなるものども、赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物を着、横座の鬼の前の如くにして、我居たるうつば木の前におまはりぬ。大方いと物おぼえず、むれ集りて、火を貂の目の如くにともして、ふたならびに居並みたる鬼、数を知らず。そのすがたのおとあると見ゆる鬼横座にゐたり。うらうへに、酒をぬらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。度々土器はじまりて、むれとの鬼殊のいひ盡し難し。酒をぬらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。折敷をかざして、何といふにかくどきぐせざることをの外に酔ひたるさまなり。末より若き鬼一人立ちて、横座の鬼、盃を左の手に持ちてみこぼれたるさま、唯この世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。あしく善く舞ふもあり。あさましとみる程に、この横座に居たる鬼のいふやう、今宵の御遊こそいつにも勝れたれ、たゞしさもめづらしからんかなでをみればやなどいふに、この翁物のつきたりけるにや、又神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出で、舞はばやと思ふを、一度は思ひ返しつ。それに何となく、鬼どもが打揚げたる拍子のよげに聞えければ、さもあれたゞ走り出で、舞ひてん、死なばさてありなんと思ひ取りて、木のうつばより、烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の、腰によきといふ木切る物さして、横座の鬼の居たる前に躍り出でたり。この鬼ども躍り上りて、こは何ぞと騒ぎあへり。翁伸びあがり屈まりて、舞ふべきかぎり、すぢりもぢり、ゑいごゑを出して、一座を走り廻り舞ふ。横座の鬼より始めて、集り居たる鬼ども、あざみ興す。横座の鬼のいはく、多くの年比この遊をしつれども、いまだかゝるものにこそ逢はざりつれ、今よりこの翁、かやうの御遊に必ずまゐれといふ。翁申すやう、沙

汰に及び候はず参り候ふべし。この度俄にて秘曲の手も忘れ候ひにたり、かやうの御覽にかなひ候はば、静につかうまつり候はんといふ。横座の鬼、いみじう申したり、必ず参るべきなりといふ。奥の座の三番に居たる鬼、この翁はかくは申し候へども、参らぬことも候はんすらん、おぼし、質をやらるべく候ふらんといふ。横座の鬼、然るべしといひて、何をか取るべきとおの言ひ沙汰するに、横座の鬼のいふやう、かの翁の面にある瘤をやらるべき、瘤は福の物なれば、それをや惜しみ思ふらんといふに、翁がいふやう、唯目鼻をばめずとも、この瘤は免し給ひ候はん、年比持ちて候ふ物を、故なく召され、條なきことに候ひなるといへば、横座の鬼、かう惜しみ申す物なり、唯それ取るべしといへば、鬼よりて、さは取るぞとて、捻ぢて引くに、大方痛き事なし。さて必ず此の度の御遊に参るべしとて、曉に鳥なご鳴きぬれば、鬼共かへりぬ。翁顔をさぐるに、年來ありし瘤あとかたなく、かい拭ひたるやうに、つやくなかりければ、撫らんことも忘れて、家に歸りぬ。妻のうば、こはいかなりつる事ぞと問へば、しかなくと語る。あさましき事かなといふ。(此迄前段、以下後段)隣にある翁、左の顔に大なる瘤ありけるが、此の翁瘤の失せたるを見て、こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ、いづこなる醫師の取り申したるぞ、我に傳へたまへ、この瘤とらんと云ひければ、これはくすしの取りたるにもあらず、しかなくの事ありて鬼の取りたるなりと云ひければ、我その定にして取らんとて、事の次第をこまかに問ひければ、教へつ。この翁いふまゝにして、その木のうつばに入りて待ちければ、まことに聞くやうにして鬼共出できたり。居まはりて、酒呑み遊びて、いづら翁は参りたるかといひければ、此の翁、恐しと思ひながら、ゆるぎ出でたれば、鬼共こゝに翁参りて候ふと申せば、

横座の鬼、こちまあれ、疾く舞へと言へば、さきの翁よりは天骨もなく、おろ／＼かなでたりければ、横座の鬼、此の度はわるく舞ひたり、かへす／＼わるし、其の取りたりし質の瘤返したべといひければ、末つ方より鬼出で来て、質の瘤返したぶそとて、今かた／＼の顔に投げつけたりければ、うらうへに瘤附きたる翁にこそなりたりけれ。物羨みはせまじきことなりとか。

といふ筋である。此は自己に能力格式が無くて、妄に他人の身の上を羨望することの非なるを諷刺した趣意の説話である。或翁が山中で鬼に逢つて、強ひていやとも思はぬ瘤を取られた、いかにも偶然の出来事である。隣の翁はわざと瘤を取られようとして、其の眞似をして、却つて失敗に終つた。初の翁は右の頬に瘤があり、隣の翁は左の頬にそれがある。さうして結果はといふと、初の翁は瘤がなくなり、後の翁は兩頬にそれがある。兩々對比して可笑味がある。實にユーモアからサタイヤに進んでゐる童話である。

國語の「こぶ」は、怖らくは頭、株、蕪、拳などと同一語源の言葉で、膨大の意を帯びてゐるやうである。塵、堪囊抄には瘤に「しひね」と訓じてゐるが、「こぶ」の語の

方が古今共に廣く行はれてゐる。「瘤は福の物」といふ思想が、宇治拾遺の出来た頃、既に存したのは面白い。

鬼に關する民衆の迷信が、中古以來盛である事は、既に源頼光の條下に述べた通りである。此の説話に見える所では、鬼の狀貌は明白に描き出されてゐる。即ち赤鬼が青衣を着けたり、黒鬼が赤衣を纏つたりしてゐる。眼一つのものや、口の無いものなどの出て来る所は、妖怪思想の混入である。瘤を取る者を山賊などと人間にせずして、鬼としてゐるのが、此の説話の超自然的要素である。ところで其の鬼が外の物もあらうに、何故に瘤の如き物を質として取つておくのであらうか。こゝに思ひ當るのは、鬼の一種に大瘻鬼といふのがある、此の鬼は其の咽喉に大きな瘻が垂れ下つてゐるのを、自ら決潰して、膿汁を嗽ふといふ話である。此の佛説から考へると、鬼と瘤との因縁が分る。

瘤を取られた幸運な老翁は、前にも言つたやうに全く偶然の仕合で、何等の應報で

もない。此の點が次に述べる舌切雀や花咲爺の如き善因あつて善果を得る説話、又他面から觀て禽獸の報恩談である所のものとは、全然趣を異にしてゐるのである。

予は此の瘤取話は、果して本邦に於て獨自に發生したものであらうか否かの點に就いて、はつきりと言ふことは出来ないが、どうも外來説話の趣致を有するやうに思へる。佛説の譬喩譚が根柢になつてゐるか、若しくは其の影響を受けてゐるものであらう。確にそれをつきとめ得ないのは遺憾である。尙旁證として考へるに足る類話ならば他にもある。即ち喜多村節信の嬉遊笑覽に存する話で、出典は明の萬曆中に楊茂謙が撰んだ笑林評といふ本である。其の説話は、

一人頂有^二懸^一。因^レ取^レ涼。夜宿^二廟中^一。神問此何人。左右答云。蹴氣毬者。神命取^二其毬^一來。其人失^レ。不^レ勝^二踴躍^一而出。次晚復有^二毬者^一。來宿^二于廟神^一。如^レ前問^レ之。左右仍以^二蹴毬者^一對。神曰。可^レ將^二昨毬^一還^レ他。其人至^レ且竟負^二兩^一去。評云。患^レ失^レ之。患^レ得^レ之。是求無^レ益^二于得^一也。

といふのである。筋は簡單だが、型は全く瘤取式である。此も支那本來の説話か、いつ頃から行はれてゐるのか、充分には分らない。我が國のと交渉があるかどうかも分らないが、とにかく此ういふ説話が漢土にも存するのは注意すべきことである。高橋亨氏の編纂に成る朝鮮の物語集を見ると、我が國のと殆ど同一の瘤取話が出てゐる。偶然の類似と見るよりは、同一源泉の物かも知れない。昔から朝鮮にもあつたといふのは、頗る面白い。筋の上で一寸した相違がある。それは瘤を以て美聲の溜め所としてゐる事や、それを鬼が老爺から買取るとしてゐる點である。西洋の民間説話は遍く探しても見ないが、獨逸のメールヘンには一寸見當らない。一つ珍しい事には愛蘭にそれがあつた。Yeats の集めた Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry. の中に、ノックグラフトンの話といふのが全く瘤取式である。

二 舌切雀

現在行はれてゐる舌切雀の童話は、やはり巖谷小波氏の日本昔噺のを標準としてお

く。此の童話は宇治拾遺物語卷三の「雀報恩事」といふのが、先づ今日知り得る原型で、それが漸次變遷して現行の話となつたらしい。宇治拾遺の本文は次のやうである。

今は昔、春つ方日うち、かなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、蟲うちとりて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、わらはへ石を取りて打ちたれば、當りて腰を打折られにけり。羽をふためかして感ふほどに、鳥のかけりありきければ、あな心う、からす取りてんとて、この女いそぎてとりて、息しかけなごして物くはず。小桶に入れて夜はなさむ。明くれば米喰はせ、飼菜にこそけて喰はせなどすれば、子ども孫など、あはれ女な刀自は、老いて雀飼はるゝとて惡み笑ふ。かくて月比よくくへば、やうく躍りありく。雀の心にも、かく養ひいけたるを、いみじく嬉しくと思ひけり。あからさまに物へ行くととも、人にこの雀見よ、物喰はせよなどいひ置きければ、子孫などあはれなんでふ雀飼はるゝとて惡み笑へども、さはいいとほしければとて、飼ふほどに、飛ぶ程になりにけり。今はよも鳥に取られじとて、外に出で、手を据ゑて、飛びやする見んとて、捧げたれば、ふらくと飛びていぬ。女多くの月比日比、暮るればをさめ、明くれば物くはせ習ひて、あはれやとびていぬるよ、又來やすると見んなど、つれづくに思ひて言ひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかりありて、この女の居たる方に、雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそいたく鳴くなれ、ありし雀の來るにやあらんと思ひて、出で、見れば此の雀なり。あはれに忘れず來たるこそあはれなれといふほどに、女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして飛びて去ぬ。女何にかあらん、雀

の落していぬる物はとて、寄りて見れば瓢の種を一つ落して置きたり。持て來たるやうこそあらめとて、取りて持ちたり。あないみじ、雀の物得て賣にしたまふとて、子ども笑へば、さはいれ植ゑて見んとて植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひひろがりて、なべての瓢にも似ず、大に多くなりたり。女悦び興じて、里隣の人にも喰はせ、取れどもく盡きもせず多かり。笑ひし子孫もこれを明暮くひてあり。一里配りなどして、はてにはまことに勝れて大なる七八つは匏にせんと思ひて、内につりつけて置きたり。さて月比へて、今はよくなりぬらんとて見れば、よくなりにけり。取りおろして、口あけんとするに、少し重し。怪しけれども、切りあけてみれば、物ひとはた入りたり。何にかあるらんとて、うつして見れば、白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆をうつしたるに、同じやうに入りてあれば、たゞことにはあらざりけり。雀のしたるにこそと、あさましく嬉しければ、物に入れてかくし置きて、残の瓢どもをみれば、同じやうに入りてあり。これを移しくつかへば、せんかたなく多かり。さて誠に頼もしき人にぞなりにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事に羨みけり。(此迄前段、以下後段)此の隣にありける女の子どものいふやう、同じ事なれど、人はかくこそあれ、はかくしきこともえし出で給はぬなど云はれて、隣の女、此の女房の許に來りて、さてもくこはいかなりしことぞ、雀のなどはほの聞けど、よくはえ知られば、もとありけんまゝにのたまへと言へば、瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしよりある事なりとて、こまかにもいはぬを、猶ありのまゝにのたまへとせちに問へば、心せばく隠すべき事かと思ひて、かうく腰折れたる雀のありしを、飼ひ生たりしを、嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來りしを植ゑ

たれば、かくなりたるなりと言へば、その種一つたべといへば、それに入りたる米などは参らせん、種はあ
るべき事にもあらず、更にえなんちらすまじとて取らせれば、我もいかで腰折れたらん雀見つけて餌はんと
思ひて、目立て、見れど、腰折れたる雀更に見えず。つとめてごに何ひ見れば、せどの方に米の散りたる
を喰ふとて、雀の躍りありくを、石を取りてもしやさて打てば、數多の中に度々打てば、おのづから打あて
られて、え飛ばぬあり、喜びて寄りて腰よく打折りて後に、取りて物ははせ、菜くはせなどして置きたり。
一が徳をだにこそみれ、まして數多ならばいかにたのもしからん。あの隣の女にはまさりて、子どもに譽め
られんと思ひて、籠のうちに米まきて何ひ居たれば、雀ども集りて喰ひに來たれば、又うちくしければ、
三つ打折りぬ。今はかばかりにてありなんと思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取り入れて、飼こそけて
喰はせなどして、月比經る程に皆よくなりたれば、喜びて外に取り出でたれば、ふらふらと飛びてみな去ぬ。
いみじきわざしつと思ふ。雀は腰打折られて、かく月比籠めおきたるを世にれたしと思ひけり。さて十日は
かりありて、此の雀ども來たれば喜びて、まづ口に物やくはへたると見るに、瓢の種を一つづつ、落して去ぬ。
さればよと嬉しくて、取りて三所に急ぎ植ゑてけり。例よりもするくとし生ひ立ちて、いみじく大になりた
り。これはいと多くもならず、七八ぞなりたる。女もみまけて見て、子どもにいふやう、はかしくしき事し
出ですと言ひしかど、われは隣の女には優りなんといへば、げにさもありなんと思ひたり。これは數の少
ければ、米多く取らんとて、人にもくはせず、われもくはせず。子どもが云ふやう、隣の女房は、里隣の人にも
くはせ、われもくひなどこそせしか。これはまして三が種なり、われも人にもくはせらるべきなりといへば、

さと思ひて、近き隣の人にもくはせ、われも子どもにも諸共に喰はせんとて、おぼらかにてくふに、苦き
事、物にも似ず、黄檗などのやうにて心地悪ふ。喰ひと喰ひたる人々も、子どももわれも、物を吐きて悪ふ
ほどに、隣の人共も皆心地を損じて來集りて、こはいかなる物をくはせつるぞ、あな怖し、つゆばかりけふ
んの口に寄りたるものも、物をつき惑ひあひて、死ぬべくこそあれと腹立ちて、言ひ定めんと思ひて來たれ
ば、ぬしの女をはじめて子共も皆物覺えず、つきちらしてふせりあひたり。いふかひなくて共にかへりぬ。
二三日も過ぎぬれば、誰々も心地なほりにけり。女思ふやう皆米にならんとしけるものを、急ぎて喰ひたれ
ば、かく怪しかりけるなめりと思ひて、残をば皆つりつけて置きたり。さて月ごろへて、今はよくなりぬら
んとて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまでひとり笑して、
桶をよせてうつしければ、蛇、蜂、蜈蚣、蠅、くちなはなど出で、目鼻ともいはず、ひと身に取附きて
刺せども、女いたさもおぼえず、たゞ米のこぼれかゝるぞと思ひて、しばし待ち給へ雀よ、少しづつ取らん
といふ。七八の瓢よりそらの毒蟲共出で、子どもをも刺しくひ、女をば刺し殺してけり。雀の腰を打折
られて、れたしと思ひて、萬の蟲どもを語らひて、入れたりけるなり。隣の雀はもと腰折れて、鳥の命取り
ぬべかりしを養ひ生けたれば、嬉しと思ひけるなり。されば物養みはすまじき事なり。

此の説話と現行の説話との筋の異同を比較すると左の如くである。

宇治拾遺

- (一) 龜、雀を助け養ふ。
- (二) 雀、放たれて飛去る。

(三) 雀、瓢の種を持つて来る。之を植ゑると生ひ廣がつて瓢が生る。人に碩つた残を瓢箪としておくと、其の中に無量の白米が満ちてゐて、幸福を得る。

(四) 隣の龜が眞似をして、故意に雀を傷つけて養ひ育てる。後、同じやうに瓢の種を得る。處が生つた瓢には毒があり、米は出ないで、毒蟲が出て、遂に龜を刺し殺す。

説話の要素に相違はあるが、大體の形式は同様である。右兩者の間に瀧澤馬琴の燕石樸志に載つてゐる筋書を置いて見ると、此の童話の變遷の過程が能く分る。即ちこれに據ると、雀の舌を切つたのは悪性の龜で、雀の飼主は善性の老夫婦である。此

現行童話

- (一) 翁、雀を愛育する。
- (二) 龜、雀が糊を甜めたのを怒つて、其の舌を切つて放つ。

(三) 翁、雀の宿を訪づれ、土産の葛籠を得て歸る。金銀財寶が其の中に満ちてゐた。

(四) 龜、翁に倣つて、雀の宿を訪づれ、土産に葛籠は貰つたが、中から妖怪や毒蟲が出る。翁、龜を懲らしめて改心させる。

の老夫婦が雀の宿をたづねて幸運を得てゐる。此の點が今の、翁を雀を愛した人、その老婦を雀の舌を切つた者としてゐるのと大なる相違である。

さて以下説話の要素を解説しよう。先づ雀の語義から始める。新井白石の東雅には大體此う云つてゐる。古事記に、天若彦の身まかつた時、雀を確女たしかめとした故事があるから、スゞメはウスメであらうか、それともスゞはサ、と同様で、其の形の小さい所から名づけられて居るだらうかと言つて、確には定めて居ない。予はスゞメのスゞは或はその鳴聲をかたどつた擬聲語に基づくものかと思つて居る。而してスゞメのメは白石も言つて居る如く、ヒメ、シメ、カモメ、ツバクラメ等に附くメと同様鳥類の汎稱であらう。雀は人家に近づいて、人に馴れ易いから、之を飼育するのは古くからあつた事で、さうして子供の遊であつた。源氏物語若紫の卷に其の適例がある。夫木抄にある土御門内大臣の歌に、「思へたゞすゞめのひなをかひおきて育つるほどはかなしきものを」とあるのを見ても、雀の子を育てるのを愛らしい事としたと云ふ思想が分る。

さういふ來歴から宇治拾遺の話を考へると、如何にもわざとらしくない。

考古畫譜に、雀の發心といふ草子の事が書いてある。糊を食つた雀の咄であらう、子雀のなくなつた歎を聞いて、諸鳥が訪うて來る、雀の父母は遂に發心して高野山に登るといふのである。此の作意は宇治拾遺の如き筋が轉々して、佛教思想が加味せられたのであらう。

一體廣く考へると、生物を愛しなければならぬといふ思想、又生物を救助した爲に其の報恩を得たといふ考は、道德思想よりも佛教思想の方が強烈である。日本靈異記や今昔物語に動物報恩談の載つてゐることは、既に浦島の條下にも述べて置いた通りである。舌切雀の童話も一面から言ふと、此の思想の結晶で、之に模倣者失敗の一段を結びつけて、勸懲主義の説話として出來上つたものである。

雀報恩談の根本資料としては、晋の干寶の搜神記卷二十に見える揚寶の話に注意しなければならぬ。宇治拾遺の話が出来る迄には、一方からは文學上支那傳説が漸次國

民の腦裏に浸潤してゐたことを忘れてはならぬ。

漢時。弘農楊寶。年九歲時。至華陰。山北見一黃雀爲鷓鴣所搏。墜於樹下。爲螻蟻所困。寶見愍之。取歸置巾箱中。食黃花。百餘日毛羽成。朝去暮還。一夕三更寶讀書未臥。有黃衣童子。向寶再拜曰。我西王母使者使蓬萊。不愼爲鷓鴣所搏。君仁愛見拯。實感盛德。乃以白環四枚與寶曰。令君子孫潔白。位登三公事。當如此環。

といふ話で、尙、梁の吳均の續齊諧記にも同様の記事を收めてゐる。此の楊寶の故事は、本朝文粹卷六、三善道統の辨官右衛門佐の闕に擧達せられんことを請ふ狀の中に、「然則病雀食花。生羽翼於暖雨。」の句があるので見ても、文人間に熟知せられてゐた様子が分る。又搜神記や梁の任昉の述異記には鶴の報恩談も出てゐる。曾積善の家に餘慶ありといふ思想の具體化したものに外ならぬのである。

宇治拾遺の瓢は文福茶釜の茶釜と同様で、超自然的趣致がある。無限の白米が出て、

を開し、國の守より金銀衣裳などあまたの恩賞賜りて、花咲の翁と召さる。隣りの男又これを羨み、彼の灰をもて枯木に花を咲かせんとて、隅みて枝にふりかくるに、花はさかで、その灰國の守の眼の中に入りければ、從者どもやすからぬ事かなといきまきて、手ごとにかくうち懲らせば、忽ち頭を傷られ、血に塗れつゝ、辛うじて逃げてかへるを、妻なりける女門より遙に見て、あなわが夫は、守より紅の衣など、黻被けさせ給へりと悦ぶ程に、近くなるまゝによく見れば、衣にはあらで、血に染みたる也。夫はやがて病臥して、遂に空しくなりたりと云ふ。

とあつて、此は現行の説話と大體一致してゐる。唯小異を認めるのは、餅又は米を搗くとしないで、麥を舂くとし、又末段には隣の男の妻を黠出して、一層滑稽の意を強めてゐる事である。

花咲爺の説話は、畢竟前の瘤取や舌切雀と同型の物で、物真似失敗を説話の骨子としてゐる。たゞ此は前の兩説話よりも脚色が幾分豊かである。即ち筋の運に層進が存するからである。枯木開花の一段も亦聯想の美しさがある。(此の花咲爺と筋は違ふが、結構上同型と見るべき著作は、新編御伽草子に收めてある福富草子である。此は

枯木開花ではなく、放屁のわざで福德を得るのである。滑稽と諷刺とが充分含まれてゐる。)

此の説話の主要成分は、言ふ迄もなく畜犬の報恩である。我が國には既に上古からして種々な忠犬傳説が傳へられてゐる。或は主の死屍を守つて死んだ犬がある。或は死後奇異を示して、舊主を有福ならしめた犬がある。又主の奇禍を救つた犬もあるし、主の忌日に斷食した殊勝な犬もある。主の仇敵を殺害した犬さへもある。

日本書紀卷二十一(崇峻紀)に、用明天皇二年の事として、捕鳥部萬の犬の事が見えてゐる。此は先づ一番古い資料である。それから今昔物語には、卷二十六の參河國始天頭糸語といふ話、卷二十九の陸奥國山狗咋ニ殺大蛇ニ語といふ話もある。古今著聞集には、五代民部丞の犬の話もあり、又元亨釋書には、播州犬寺の縁起も載つてゐる。

支那に於ける類話を参照すると、搜神記卷二十に二個の説話がある。即ちその一つ

は、

孫權時。李信純襄陽紀南人也。家養一狗。字曰黑龍。愛之尤甚。行坐相隨。飲饌之間。皆分與食。忽一日。於城外飲酒大醉。歸家不及臥於草中。遇太守鄭瓊出獵。見田草深。遣人縱火焚之。信純臥處恰當順風。犬見火來。乃以口拽純衣。純亦不動。臥處北有二溪。相去三五十步。犬即奔往入水。濕身走來。臥處。周廻以身灑之獲免。主人大難。犬運水困乏。致斃于側。俄爾信純醒來見犬已死。遍身毛濕。甚訝其事。視火踪跡因爾。慟哭聞于太守。太守憫之曰。犬之報恩甚于人。人不之知。恩豈如犬乎。即命具棺槨衣衾葬之。今紀南有義犬葬。高十餘丈。

他の一つは、

太興中。吳民華隆。養一快犬。號曰的尾。常將自隨。隆後至江邊。伐荻。爲大蛇盤繞。犬奮咋蛇。蛇死。隆僵仆無知。犬彷徨涕泣。走還舟。復反草中。徒

伴怪之。隨往見隆悶絕。將歸家。犬爲不食。比隆復蘇始食。隆愈愛惜同于親戚。

と云ふので、前の話のは主の奇禍を救済しようとして、遂に其の命を隕した忠犬であつて、後のはけなげにも大蛇を咋ひ殺して、主人の危難を救つた忠犬である。晋の陶潜の搜神後記卷九にも同様の説話が二つ出てゐる。尙諸外國に忠犬傳説が擴つてゐる。パーリング、グールドの著書に據るに、其の代表的の説話はウェールズの皇子レウエリンの畜犬ゼラート (Gellert) である。類話は露西亞にも獨逸にもある。それから國によつては、犬でなく、貂や獺や鼬となつてゐるものもある。

さて本に還つて、老爺が愛犬の報恩によつて有福となつた趣向は、今昔物語にある參河の郡司の妻の蠶の話に一番よく似てゐる。此の話は一面に以て犬頭の絲の由來を語つた説明的傳説であるが、飼犬の鼻の兩穴から四五千兩ばかり、絲を生じたといふのは、老爺が犬に教へられて、小判を掘出したのと同類で、犬を埋めた所の木で造ら

れた白が、白として又灰と迄なつても、始終幸福を生み出すといふ點は、之に忠犬の精魂が宿つたものとして考へられてゐるので、いかにもローマンチックである。枯木開花の思想も亦超自然的であるが、此はその根柢に佛教思想が隠れてゐるやうである。枯木開花といふ事は「雪ふれば誓たのもし初瀬山枯れたる木にも花咲きにけり（續詞花集）」といふ古歌もある通り、千手觀音の利生を意味するのである。併し花咲爺童話の表面には少しも佛教的な所はない。高橋亨氏の朝鮮の物語集に解語龜と題する話がある。之が珍しくも花咲爺式であるのは面白い。異なる所は、兩人の老爺でなく、兄弟の間柄で、犬ではなく龜である。

最後に本章の結びとして一言を添へて置きたい。物真似失敗式童話は西洋にも勿論存在する。最も著名なのはグリム童話集のフラウ、ホルレ (Frau Holle) で、成功する方は繼子の姉娘、失敗する方は妹である。エソップのマーキューリー神と仕事師と題する斧に關しての話も同型と認める事が出来る。尙其のエソップには禽獸童話として

多くの類例がある。白鳥を羨んだ鳥、孔雀を真似た鳥、獅子の皮を装つた驢馬、小犬の身の上を羨んだ驢馬など、皆身の上知らずの僭上者であり、愚者であるとして語られてゐる。此等は全然諷刺を帯びた教訓談である。

第五章 結論

予は國民童話の由來を解説した筆を擱くに當つて、一言結論を卷末に添へたいと思ふ。

上來叙述した所によつて、我が國民童話の結構、脚色は、頗る多種多様で、其の含有する思想の如きも、かなり多岐に亙つてゐる事は、何人も氣の附く所であらう。即ち國民固有の思想が何處迄發展してゐるか、支那思想、印度思想の如き所謂外來思想が如何に輸入せられ、醇化せられてゐるかは、童話研究の方面からも、國文學史と同じやうに了解が出来よう。浦島傳説に支那神仙説の要素が加味せられたり、桃太郎の

將來する實物に佛説に基づくものがあつたりしても、永い間には能く國民思想と調和が取れて、何等不自然の感じがない。國民が絶大な包容力を以て、固有思想に外來思想を同化せしめて行つた蹤跡は、一般文學と同様、傳説童話の方面でも歴々として掌を指す如きものがある。支那種、印度種たかの思想、信仰が移植せられて、我が國で立派に開花してゐるのは洵に面白い現象で、我が國民童話は實に東洋思想の綜合を遂げたものである。これ即ち過去の文化の特徴その物で、傳説童話は純文學と共に、その文化を遺憾なく反映してゐるのである。

我が國民童話の特色を一考するに、概して雍容嫺雅の風を備へてゐる。浦島傳説にしても、羽衣傳説にしても、海洋を有して風景美に富んだ我が國土に發生しただけ、此の上もなく背景が美しい。花咲爺の思ひ掛けの幸福が、枯木に花の目覺める程の麗しさとは、よくよく日本のである。忠君愛國、義勇、家族的愛、動物愛育の如き道德的要素もいろ／＼な説話に漲つてゐる。殘忍苛酷な脚色が禽獸童話には無いではない

が、國民一般としては之を嫌つてゐるのは勿論である。

迷信は今尙文明人の間にも存する。況や過去の我が國に於ては、佛教や陰陽道の方から由來して、それはなか／＼盛に行はれた。鬼魅の實在を信じ、物の精を信じ、神佛の申し子を祈り、卜筮、禁厭を頼むといふ類の事は枚擧に遑がない。併し是も亦時代精神を有體に反映したものととして捨つ可からざるものである。

之を要するに傳説や童話は廣い意味での國民文學である。特殊な文人の手に成つた技巧詩でないだけ、一層普遍的である。之を保存し、之を尊重し、之が意義を明白にすることは、國民教養上重要な事で、教育者、文化研究家、乃至新文藝を興さうとする文藝家等の決して閑却すべからざる絶好題目であると思ふ。

國民童話終

大正十一年十月五日發行

文化叢書第十六編
國民童話

著作權所有

著者

野村八良

發行者

長坂金雄

印刷者

岩見米三郎

發行所

東京市神田區今川小路三丁目九番地
國史講習會

電話九段二三一五番
振替東京一六八五番

定價八十錢

(堂正長川總版製)

文 化 叢 書 既 刊 書 目

定 價 各 冊 十 八 錢 • 送 料 四 錢 宛

◇ 第一編	人類の進化	山内繁雄著
◇ 第二編	佛教と國民思想	鷲尾順敬著
◇ 第三編	江戸と上方	笹川臨風著
◇ 第四編	歌舞伎劇と其俳優	關根默庵著
◇ 第五編	旗本と町奴	栢原昌三著
◇ 第六編	竹本劇と其作家	岡本綺堂著
◇ 第七編	南 畫 史 要 (定價壹圓)	梅澤和軒著
◇ 第八編	東洋文化觀	松井等著
◇ 第九編	古墳と上代文化 (定價壹圓)	高橋健自著
◇ 第十編	圍 碁 將 棋	幸田露伴著
◇ 第十一編	趣味の民謡史 (定價壹圓)	藤澤衛彦著
◇ 第十二編	日本憲法制定史	藤井甚太郎著
◇ 第十三編	茶道 茶器の見方	今泉雄作著
◇ 第十四編	日本 舞蹈 史	岩橋小彌太著
◇ 第十五編	儒教と日本文化 (定價壹圓)	中村久四郎著

505

26

終